岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 163

水 口 遺 跡

広域営農団地農道整備事業(備前東部地区)に伴う発掘調査

2 0 0 2

岡 山 県 教 育 委 員 会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 163

水 口 遺 跡

広域営農団地農道整備事業(備前東部地区)に伴う発掘調査

2 0 0 2

岡 山 県 教 育 委 員 会

1　調査地周辺（西から）

2　S18

3　G1・G2

序

標高507ｍを測る熊山は、今では、麓のＪＲ熊山駅からの登山道が整備されて、軽登山には格好の目的地となっておりますが、備前一の高峰として、古くから人々の信仰の対象となってまいりました。その精緻で特異な構造が訪れる者の目を奪う山頂の石積遺構は、内部から出土した筒形容器などから奈良時代に造られたものとされ、国指定の史跡となっております。

このたび、その熊山北側の山裾に計画された農道整備事業に伴って、水口遺跡の発掘調査を実施いたしました。調査対象地は、丘陵斜面から平地への地形変換点にあたるところでありましたが、多くは旧地形も斜面の未利用地であり、水田造成によって大きく改変を受けておりました。その中で、調査範囲の東寄りでは、台地上に営まれた弥生時代の集落跡の一部を明らかにすることができ、１軒の竪穴住居では、赤い顔料を求めて、ベンガラを磨り潰す作業を行っていたことが分かりました。調査範囲の北側に続くこの台地は、その後も掘立柱の建物などが建てられて、人々の生活の場として利用を続けられていたことも確認されました。

その調査成果をまとめた本書が、埋蔵文化財に対する理解を深めるとともに、教育・学術のために広く活用されることを期待いたします。

なお、発掘調査の実施から本書の作成に至るまで、東備地方振興局をはじめとする関係各位から多大な御協力をいただきました。ここに深甚なる謝意を表すものであります。

平成14年３月

岡山県古代吉備文化財センター
所　長　　正　岡　睦　夫

例　言

1　本書は、広域営農団地農道整備事業(備前東部地区)に伴って、岡山県農林水産部農村振興課の依頼を受け、岡山県古代吉備文化財センターが平成10・11年度に実施した、水口(みなくち)遺跡の発掘調査報告書である。

2　水口遺跡は、赤磐郡熊山町奥吉原(あかいわぐんくまやまちょうおくよしわら)水口に所在する。

3　確認調査は、平成10年度に重根弘和が担当して実施し、平成11年度にも光永真一・氏平昭則が担当して実施している。面積は、それぞれ60㎡と625㎡である。

　発掘調査は、平成11年度に光永・氏平が担当して実施した。面積は3,945㎡である。

4　本書の作成は、平成13年度に実施し、光永が担当した。

5　出土遺物の鑑定・分析については、下記の専門家・機関に依頼した。記して深謝の意を表す次第である。

・石器の石材鑑定　　妹尾護（倉敷芸術科学大学）

・赤色顔料の鑑定　　本田光子（別府大学）

・鉄滓の成分分析　　九州テクノリサーチ株式会社

6　本書の執筆は、第３章第１節を氏平が担当した他は光永が担当し、全体の編集は光永が行った。

7　遺物写真については、江尻泰幸氏の協力と援助をいただいた。

8　出土遺物および図面・写真類は、岡山県古代吉備文化財センター (岡山市西花尻1325-3)に保管している。

凡　例

1　本書に用いた高度値は海抜高であり、方位は平面直角座標系Ⅴによる第１・３図を除いて磁北である。調査地における磁北は西偏６°30′を測る。また、各調査区の全体図等には、国土座標を表示している。

2　本書記載の遺構・遺物の図には個別にその縮尺率を記しているが、基本的には次のとおり統一している。

竪穴住居・長方形竪穴住居状遺構・掘立柱建物・段状遺構：１／60

土壙・焼土壙・近世墓等：１／30

土器・陶器：１／４　　土製品・石器・金属器：１／２・１／３　　玉：１／１

3　各調査区の全体図においては、遺構番号の表記にあたって、次の略号を付している。

竪穴住居：**住**　　掘立柱建物：**建**　　長方形竪穴住居状遺構：**長**　　段状遺構：**段**

近世墓：**墓**　　焼土壙：**焼**　　土壙：**土**　　溝：**溝**

4　遺物番号については、土器・陶器には番号だけを付け、その他のものには材質によって次の略号を番号の前に付けている。

土製品：**C**　　石器：**S**　　金属器：**M**　　ガラス製品：**G**

5　本書においては、土器の径が不確実な場合に、中軸線の両脇で輪郭線に空白を設けて表示している。また、土器観察表においては、数値を括弧書きしている。

6　本書記載の遺構図において、被熱範囲等に付した点描等は、次のとおり統一している。

被熱・・・　　炭・・・　　焼土・・・

7　本書記載の土色・土器色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を基準にしている。

8　本書の第３図は、国土交通省国土地理院発行の１/50,000地形図「和気」を複製し、加筆したものである。

9　本書における時期区分は、一般的な政治史区分に準拠している。

本文目次

序
例言
凡例
第１章　調査に至る経緯と調査の経過 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査および整理の経過 …… 1
　第３節　調査および整理の体制 …… 3
　第４節　日誌抄 …… 3
第２章　遺跡の位置と環境 …… 4
第３章　調査の概要 …… 7
　第１節　1　区 …… 7
　第２節　2　区 …… 21
　第３節　3　区 …… 24
　第４節　4　区 …… 25
　第５節　5　区 …… 27
　第６節　6　区 …… 29
第４章　まとめ …… 31
報告書抄録

挿図目次

第1図 遺跡位置図（1/1,500,000）…… 1
第2図 調査区設定図（1/5,000）…… 1
第3図 確認調査試掘溝配置図（1/5,000）…… 2
第4図 周辺の遺跡分布図（1/50,000）…… 5
第5図 1区全体図（左:下層 右:上層）（1/300）…… 7
第6図 1区南側壁東半土層図（1/60）…… 8
第7図 竪穴住居1～3（1/60）・竪穴住居1出土遺物（1/2）…… 9
第8図 竪穴住居2（1/60）…… 10
第9図 竪穴住居2出土遺物（1/2・1/3・1/4）…… 12
第10図 竪穴住居3（1/60）・同炭化物検出状況（1/60）・出土遺物（1/2・1/3・1/4）…… 13
第11図 長方形竪穴住居状遺構1（1/60）・出土遺物（1/4）…… 14
第12図 掘立柱建物1（1/60）…… 14
第13図 土壙1・2（1/30）…… 15
第14図 土壙3・4（1/30）…… 15
第15図 1区包含層出土遺物(1)（1/2・1/3・1/4）…… 16
第16図 掘立柱建物2（1/60）・掘立柱建物2・3出土遺物（1/4）…… 17
第17図 掘立柱建物3・4（1/60）…… 18
第18図 焼土壙1（1/30）…… 18
第19図 土壙5・6（1/30）…… 19
第20図 溝1・2断面図（1/30）…… 19
第21図 1・4・5区包含層出土遺物（1/3・1/4）…… 20
第22図 2区全体図（1/300）…… 21
第23図 2区西側壁土層図（1/60）…… 21
第24図 焼土壙2（1/30）・出土遺物（1/4）…… 22
第25図 土壙7（1/30）…… 22
第26図 土壙8（1/30）・出土遺物（1/4）…… 22
第27図 段状遺構1（1/60）・出土遺物（1/4）…… 23
第28図 3区全体図（1/300）…… 24
第29図 焼土壙3（1/30）…… 24
第30図 3区包含層出土遺物（1/3）…… 24
第31図 4区全体図（1/300）…… 25
第32図 4区北側壁東半土層図（1/60）…… 25
第33図 土壙9・10（1/30）…… 26
第34図 4区包含層出土遺物（1/3）…… 26
第35図 5区包含層出土遺物（1/1）…… 27
第36図 5区全体図（1/300）…… 27
第37図 焼土壙4・土壙11（1/30）…… 28
第38図 近世墓1（1/30）・出土遺物（1/3）…… 28
第39図 6区全体図（1/300）…… 29
第40図 6区包含層出土遺物（1/4）…… 30

表目次

土器観察表 …… 33
石器観察表 …… 34

図版目次

巻頭図版－1　調査地周辺（西から）
　　2　S18
　　3　G1・G2
図版1－1　1区東半下層遺構面（北西から）
　　2　1区西半下層遺構面（南東から）
　　3　竪穴住居2（南西から）
図版2－1　竪穴住居3炭化物検出状況（北東から）
　　2　竪穴住居3（北から）
　　3　長方形竪穴住居状遺構1（北東から）
図版3－1　掘立柱建物1（北東から）
　　2　土壙1（北西から）
　　3　1区東半上層遺構面（北西から）
図版4－1　1区西半上層遺構面（北西から）
　　2　掘立柱建物2・3（南東から）
　　3　掘立柱建物4（北東から）
図版5－1　焼土壙1（東から）
　　2　溝1（北西から）
　　3　溝2（南から）
図版6－1　2区（南東から）
　　2　焼土壙2（北東から）
　　3　段状遺構1（北東から）
図版7－1　3区東半（北西から）
　　2　3区西半（南東から）
　　3　焼土壙3（北東から）
図版8－1　4区東半（北西から）
　　2　4区西半（南東から）
　　3　土壙9（北東から）
図版9－1　5区東半（東から）
　　2　5区西半（北西から）
　　3　焼土壙4（北から）
図版10－1　近世墓1遺物出土状況（南西から）
　　2　6区東半（西から）
　　3　6区西半（東から）
図版11－1　出土弥生土器
　　2　出土土師器・須恵器
図版12　出土石器・土製品・金属器

第１章　調査に至る経緯と調査の経過

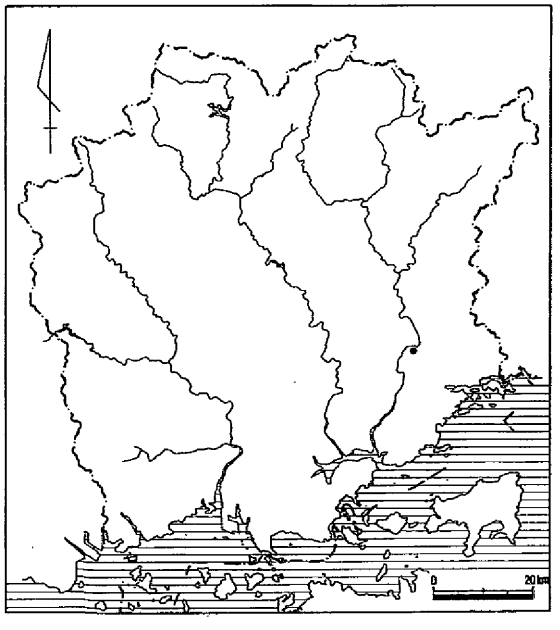
第１節　調査に至る経緯

岡山県農林水産部農村振興課は、備前東部地区の広域営農団地農道整備事業の一環として、和気郡和気町から赤磐郡熊山町へ吉井川左岸を通る農道の建設を計画し、熊山町奥吉原地内に路線を設定した。この路線上には、周知の遺跡である水口遺跡が所在したため、埋蔵文化財発掘の通知に対する協議の結果、工事着手前に確認調査を実施することとなった。

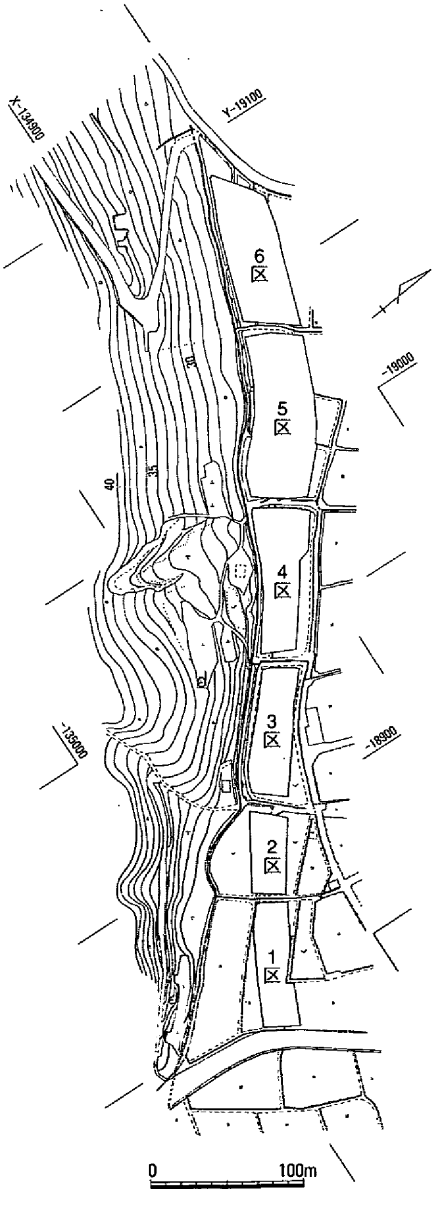
第２節　調査および整理の経過

確認調査は、平成11年１月に岡山県古代吉備文化財センター(以下、文化財センター)が実施した。周知の範囲の事業予定地内でＴ１からＴ６の６本の試掘溝を調査した結果、遺構密度に差はあるものの、弥生時代から近世の集落跡が所在することが判明した（第３図)。

この確認調査に基づく再協議の結果、5,400㎡を対象とする全面調査を実施することと、対象地周辺の事業予定地に遺跡が広がる可能性があるため、その確認調査を行うこととされた。



第１図　遺跡位置図（1/1,500,000）

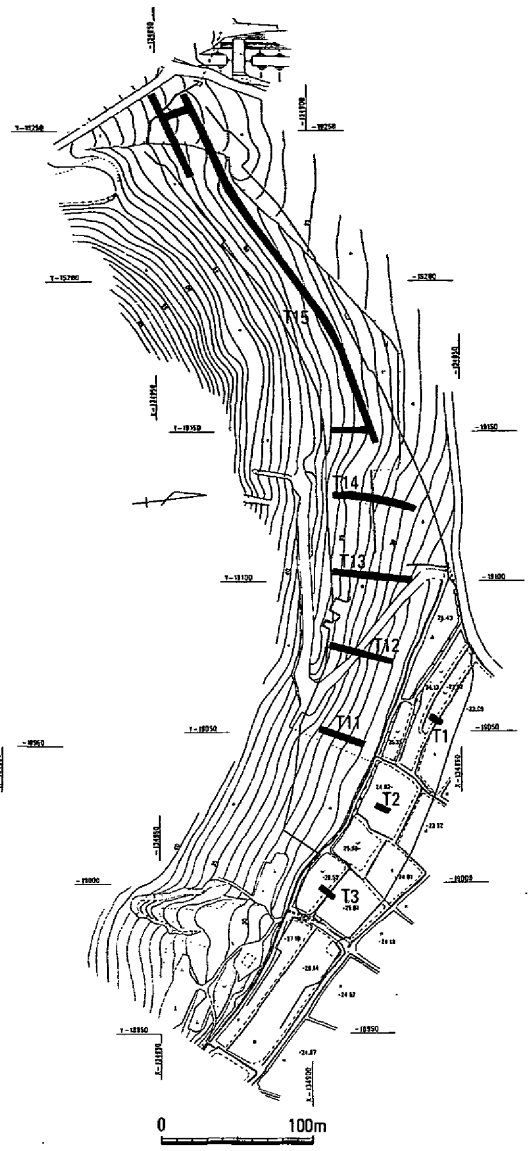


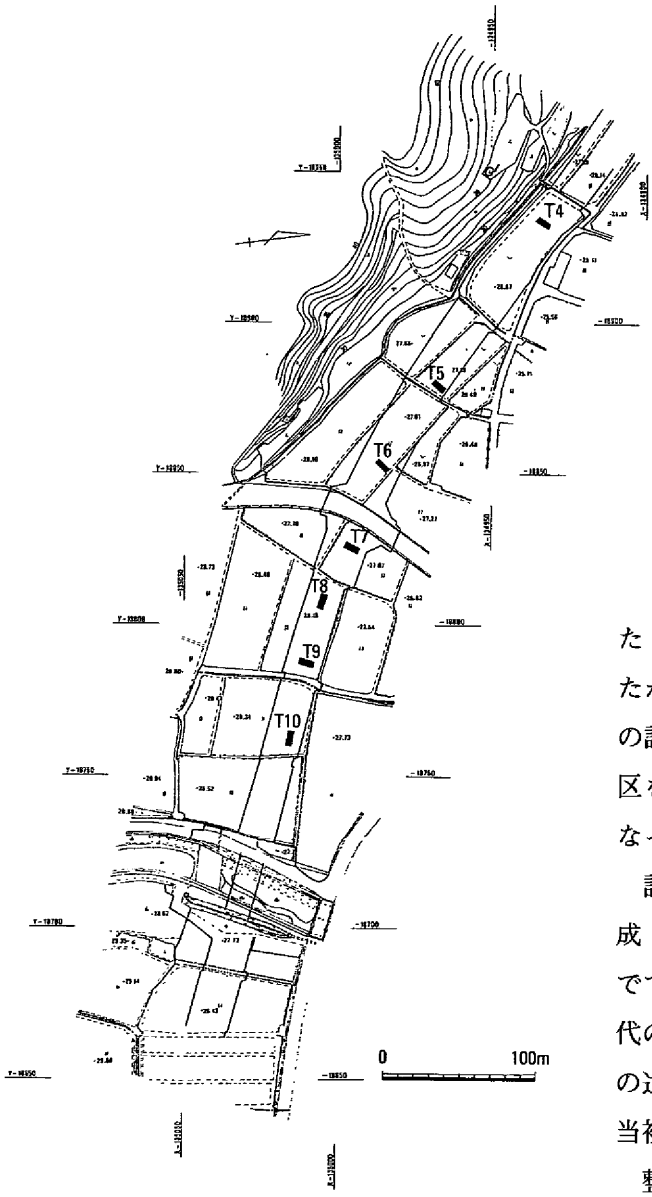
第２図　調査区設定図（1/5,000）

全面調査および確認調査は、平成11年５月～12月の８カ月間、文化財センター職員２名で実施した。

確認調査については、全面調査対象地の東に続く平坦部に対して、Ｔ７からＴ10の４本の試掘溝を調査したが、山からの流土堆積を認めたのみで、遺構は検出されなかった。西側の丘陵斜面については、重機を使用してＴ11からＴ15の長大な試掘溝によって調査したが、遺構・遺物とも認められなかった（第３図）。調査面積は、625㎡である。

全面調査は、調査対象地を５カ所で横切る水路・農道を維持するためにこれらを対象から除外したので、東から１～６区に六つの調査区に分けて実施した（第２図）。水田造成土は重機によって掘削したが、排土を域外へ搬出できないので、それぞれの調査区における打って返し方式としたため、２区を除いてそれぞれをさらに２分割しての調査となった。





第３図　確認調査試掘溝配置図（1/5,000）

調査対象地はいずれも現状では水田として造成・利用されているが、平坦地は１区から２区までで、３区以西は丘陵斜面の裾部であり、弥生時代の遺構は１・２区に集中し、３区以西には若干の遺構が認められたのみである。調査実施面積は、当初計画より減って、3,945㎡となった。

整理作業は、平成13年４月に調査員１名が文化財センターで行った。

第３節　調査および整理の体制

平成10年度

岡山県教育委員会
　教 育 長　　黒瀬　定生
岡山県教育庁
　教育次長　　平岩　　武
　＜文化課＞
　課　　長　　髙田　朋香
　課長代理　　西山　　猛
　参　　事　　正岡　睦夫
　課長補佐　　松本　和男
　(埋蔵文化財係長)
　文化財保護主任　大橋　雅也
　主　　事　　三宅　美博
岡山県古代吉備文化財センター
　所　　長　　葛原　克人
　次　　長　　大村　俊臣
　＜総務課＞
　総務課長　　小倉　　昇
　課長補佐　　安西　正則
　(総務係長)
　主　　査　　山本　恭輔
　＜調査第一課＞
　調査第一課長　　高畑　知功
　課長補佐　　中野　雅美
　(第一係長)
　主　　事　　重根　弘和
　　(調査担当)

平成11年度

岡山県教育委員会
　教 育 長　　黒瀬　定生
岡山県教育庁
　教育次長　　宮野　正司
　＜文化課＞
　課　　長　　松井　英治
　課長代理　　佐々部和生
　参　　事　　正岡　睦夫
　課長補佐　　松本　和男
　(埋蔵文化財係長)
　文化財保護主任　大橋　雅也
　主　　任　　奥山　修司
岡山県古代吉備文化財センター
　所　　長　　葛原　克人
　次　　長　　大村　俊臣
　＜総務課＞
　総務課長　　小倉　　昇
　課長補佐　　安西　正則
　(総務係長)
　主　　査　　山本　恭輔
　＜調査第三課＞
　調査第三課長　　柳瀬　昭彦
　課長補佐　　浅倉　秀昭
　(第三係長)
　文化財保護主幹　光永　真一
　　(調査担当)
　文化財保護主事　氏平　昭則
　　(調査担当)

平成13年度

岡山県教育委員会
　教 育 長　　宮野　正司
岡山県教育庁
　教育次長　　國貞　忠克
　＜文化課＞
　課　　長　　松井　英治
　課長代理　　松本　和男
　(埋蔵文化財係長)
　課長代理　　藤井　守雄
　主　　任　　奥山　修司

岡山県古代吉備文化財センター
　所　　長　　正岡　睦夫
　次　　長　　能登原　巧
　＜総務課＞
　総務課長　　安西　正則
　総務係長　　田中　秀樹
　主　　任　　小坂　文男
　＜調査第一課＞
　調査第一課長　　高畑　知功
　課長補佐　　島崎　　東
　(第二係長)
　文化財保護主幹　光永　真一
　　(整理担当)

第４節　日誌抄

平成10年度

平成11年１月７日　確認調査(Ｔ１～６)開始。
　　22日　確認調査(Ｔ１～６)終了。

平成11年度

平成11年５月10日　１区西半調査開始。
　　11日　４区西半調査開始。
　　18日　３区西半調査開始。
　　７月８日　１区西半調査終了。
　　９日　３区西半調査終了。
　　14日　２区調査開始。
　　８月３日　３区東半調査開始。
　　４日　確認調査(Ｔ７～10)開始。
　　５日　４区西半調査終了。
　　24日　確認調査(Ｔ７～10)終了。
　　26日　６区西半調査開始。
　　31日　５区西半調査開始。
　　９月６日　３区東半調査終了。
　　９月９日　２区調査終了。
　　14日　５区西半調査終了。
　　17日　６区西半調査終了。
　　１区東半調査開始。
　　30日　確認調査(Ｔ11～15)開始。
　　10月４日　６区東半調査開始。
　　６日　５区東半調査開始。
　　11月18日　４区東半調査開始。
　　19日　５区東半調査終了。
　　22日　確認調査(Ｔ11～15)終了。
　　12月10日　１区東半調査終了。
　　13日　６区東半調査終了。
　　15日　４区東半調査終了。

平成13年度

平成13年４月２日　整理作業開始。
　　27日　整理作業終了。

第２章　遺跡の位置と環境

岡山県の地形は大きく五つの区域に区分される。北に標高900～1,300ｍの山頂を連ねる中国山地、中央部に300～600ｍで台地状をなす吉備高原、その南に位置する瀬戸内丘陵地へと、山地は階段状に南に下がり、中国山地と吉備高原の境に津山盆地が開け、瀬戸内丘陵地帯を分断するように岡山平野が広がる。遺跡の所在する赤磐郡熊山町は、吉備高原の南東端に位置して瀬戸内丘陵地への変換点に当たり、吉井川によって形成された小平地は広義の岡山平野の東端に位置づけられる。

町域内の地形をみると、四周を小起伏山地に囲まれ、その間に河川に沿う小低地が入り組む状況となっている。吉備高原地帯を南下した吉井川は、後述する熊山山塊に阻まれてほぼ直角に西へ流路を曲げた地点から町域に入り、熊山山塊の北裾を西へ進んだ後に、大盛山山塊の手前で南西へ流れを変え、この一帯に熊山低地を形成して、瀬戸町へ流下する。町域の西部を西から東へ流れる可真川は、町域のほぼ中央部で北西から流れ下る小野田川に合流し、さらに南東方向へ直進して、吉井川へ注いでいる。小野田川・可真川の流路は、この地域の構造線に沿っており、流域にそれぞれ低地を形成している。山地は、南に大盛山山塊、北西に石蓮寺山山塊、北に金子山山塊、北東に円光寺・外国山山塊が連なり、吉井川の左岸に熊山山塊が位置する。これらの山地帯を構成する地質は、石蓮寺山山塊から金子山山塊にかけて花崗岩がみられる他は、主に流紋岩であるが、その境界付近に相当する父井原から可真の北側を通って岡山ネオポリスへ抜ける一帯には山砂利層が分布しており、古吉井川の流路と想定されている。この古吉井川は別としても、吉井川は熊山低地内で何度も流路を変えながら侵食・堆積を繰り返しており、熊山低地の利用は吉井川の氾濫・洪水との戦いの歴史となっている。

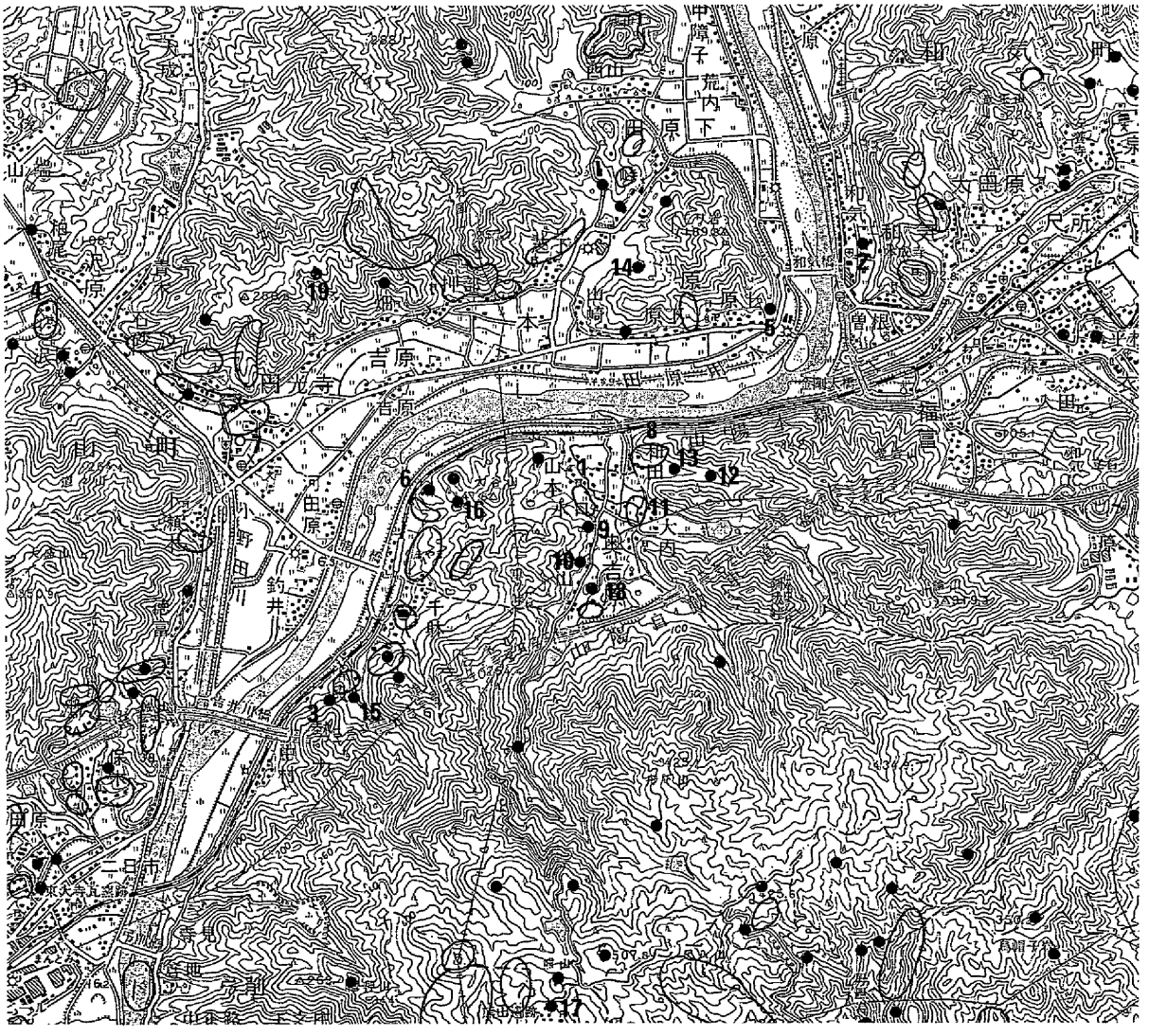
標高507.8ｍの熊山を最高峰とする熊山山塊は、吉備高原の南東端としての名残を標高400ｍ前後までの傾斜の緩やかな山頂部分にみせるが、それ以下は急傾斜となって周囲の谷や低地に向かって下っている。この山頂部分に所在する熊山池付近を源として、北斜面に４㎞余りの流路を刻むのが和田川である。上流部の急な流れの終わる標高76ｍ付近から谷田が開け、東から大内川が合流する辺りでは和田川低地として広い水田域を形成している。この和田川低地の北端も、熊山低地と同様に吉井川の影響下にあったことは言うまでもない。

氷河期が終わり、いわゆる縄文海進によって瀬戸内海が形成されたのちに、この周辺でヒトの営みが確認された場所としては、トチ・ドングリの貯蔵穴が検出された山陽町南方前池遺跡が有名であるが、この他に吉永町南方柏原では石棒が発見されている。地形的に同じような条件下にある熊山町内の低地縁辺においても、埋没した縄文遺跡の所在する可能性はあるが、未だ確認されていない。

水稲耕作の開始により低地の水田化が進められた弥生時代の遺跡は、吉井川と小野田川の合流地点にあたる松木地区の山裾、可真川流域の低丘陵などとともに、熊山山塊の北裾に位置する千躰地区等に点在し、水口遺跡もその一つである。また、吉井川沿いの和気町和気の低地からは、突線文式の銅鐸が出土したとされている。これらのうち、千躰地区の勢力遺跡では、丘陵の尾根上から斜面にかけて３軒の竪穴住居と２棟の掘立柱建物を検出し、弥生時代中期の集落の一例が確認されている。現在の千躰地区には狭小な可耕地しか認められないが、吉井川が西寄りに流路を置けば広い可耕地を眼下にできていたと想定される。一方、可真川流域の北側に所在する低丘陵上の前内池墳墓群他では、中

期から後期にかけて集落の営まれた丘陵が、後期の後半に至って土壙墓群によって墓地として利用されていく状況が調査されており、これら２遺跡での在り方から、集落は丘陵上から低地へと移動したことが想定される。弥生時代の墓地としては、前内池墳墓群の他に、可真川と小野田川の合流地点に臨む丸崎４号墳が、特殊壺・特殊器台の出土によって弥生墳丘墓と認識され、弥生時代後期の吉備に共通する葬送儀礼が確認される東限となっている。

古墳時代になると、町域内の各低地に臨む尾根上につぎつぎと古墳が築かれるが、この中で前方後円墳の位置を見ていくと、次のようになる。和気町域で大きく屈曲する吉井川に右岸から張り出す和気町原の大明神古墳、熊山山塊に沿って南西に曲がる吉井川左岸に立地して熊山低地を見下ろす武宮



1	水口遺跡	6	武宮古墳	11	和田遺跡	16	猿喰池たたら跡
2	伝銅鐸出土地	7	円光寺遺跡	12	和田奥谷たたら跡	17	熊山遺跡
3	勢力遺跡	8	和田１～４号墳	13	和田たたら跡	18	満願寺跡
4	丸崎古墳群	9	荒神坂古墳群	14	石生天皇遺跡	19	円光寺廃寺
5	大明神古墳	10	谷山古墳	15	段たたら跡		

第４図　周辺の遺跡分布図（1/50,000）

古墳、可真川流域の奥部に位置する小丸山古墳・弥上古墳・北の前１号墳である。それぞれが、各々の地域の首長墓と位置づけられるが、前二者については吉井川の水運を管理する存在であったことも想定されよう。弥上古墳からは多数の副葬品を伴って亀甲形の陶棺が出土しており、陶棺はこの他にも熊山町弥上の弥上小屺古墳・畑古墳から出土している。小丸山古墳からは人物埴輪が出土したとされるが、熊山町円光寺から馬・犬・盾などの形象埴輪とともに出土した人物埴輪はほぼ完形に復元されている。和田川低地周辺の古墳としては、低地北東部の和田１～４号墳、低地南部の荒神坂古墳群と谷山古墳があり、いずれも円墳で、和田１～４号墳は横穴式石室を採用している。

この時代には、朝鮮半島からの新技術として、須恵器生産・鉄生産が導入される。前者について熊山町内での窯跡の検出はないが、佐伯町矢田部の戸瀬池窯跡、長船町土師の木鍋山一号窯跡、山陽町中島の別所窯跡など、周辺地域では６世紀の中頃には須恵器生産が行われており、岡山県内でも早くに窯業を始めた地域と認識される。鉄生産については、弥上古墳・小丸山古墳などの６世紀後半の首長墓から鉄滓が出土しており、この地域での始期を示すものと考えられる。鉄滓散布地は、瀬戸町鍛冶屋、熊山町沢原・勢力・千躰、和気町大田原などに所在し、和田川低地内でも２カ所が知られている。さらに、和田川低地の対岸となる和気町本では、時代がやや下るものの石生天皇遺跡において９世紀初頭の製鉄炉遺構が検出されている。

10世紀に作られた『和名類聚抄』によれば、律令制下の熊山町域は吉井川を境として備前国磐梨郡と和気郡に分けられ、右岸側が磐梨郡で可真川流域の珂磨郷と南部の和気郷に分かれており、和田川低地を含む左岸側は和気郡新田郷に属している。この郡域は、和気清麻呂の進言により延暦７(788)年に磐梨郡が設置されて確定したものである。備前国は山陽道に連なっており、熊山町域内では吉井川右岸の円光寺・外国山山塊の山裾を西へ下って松木から小野田川を遡り、可真川の南をさらに西へ進んでいる。珂磨郷には駅家が置かれたとされており、松木がその候補と考えられている。

町域のみならず東備地域でも最高峰となる熊山の山頂には、特異な石積遺構が所在する。基段上に３段に積まれており、下段で１辺の長さ12ｍ弱を測り、中央に掘られた竪穴石室に陶製の筒形容器が入れられていたとされる。石積遺構の築成年代は、筒形容器内に納められた三彩施釉の小壺から奈良時代と考えられているが、この遺構の性格については定説に至っておらず、戒壇説・経塚説・墳墓説・仏塔説などの諸説がある。いずれにせよ、この熊山が信仰の対象であったことを示すものと考えられ、熊山山塊では同様の石積遺構が大小あわせて32基確認されており、吉井川を挟んで対峙する大平山山頂にも小規模であるが構造の酷似する石積遺構が所在する。

熊山に対する信仰はその後も続き、後に帝釈山霊山寺が開かれ、山上伽藍が配置される。この霊山寺の坊の一つである善坊が水口遺跡の北に続く平地に想定されており、奥吉原地区にはこの他にも満願寺が所在したとされている。吉井川右岸側では、松木の円光寺裏山から備前国分寺に使用されたものと同じ工房で作られたとされる平安時代の軒丸瓦が出土している。

＜主要参考文献＞

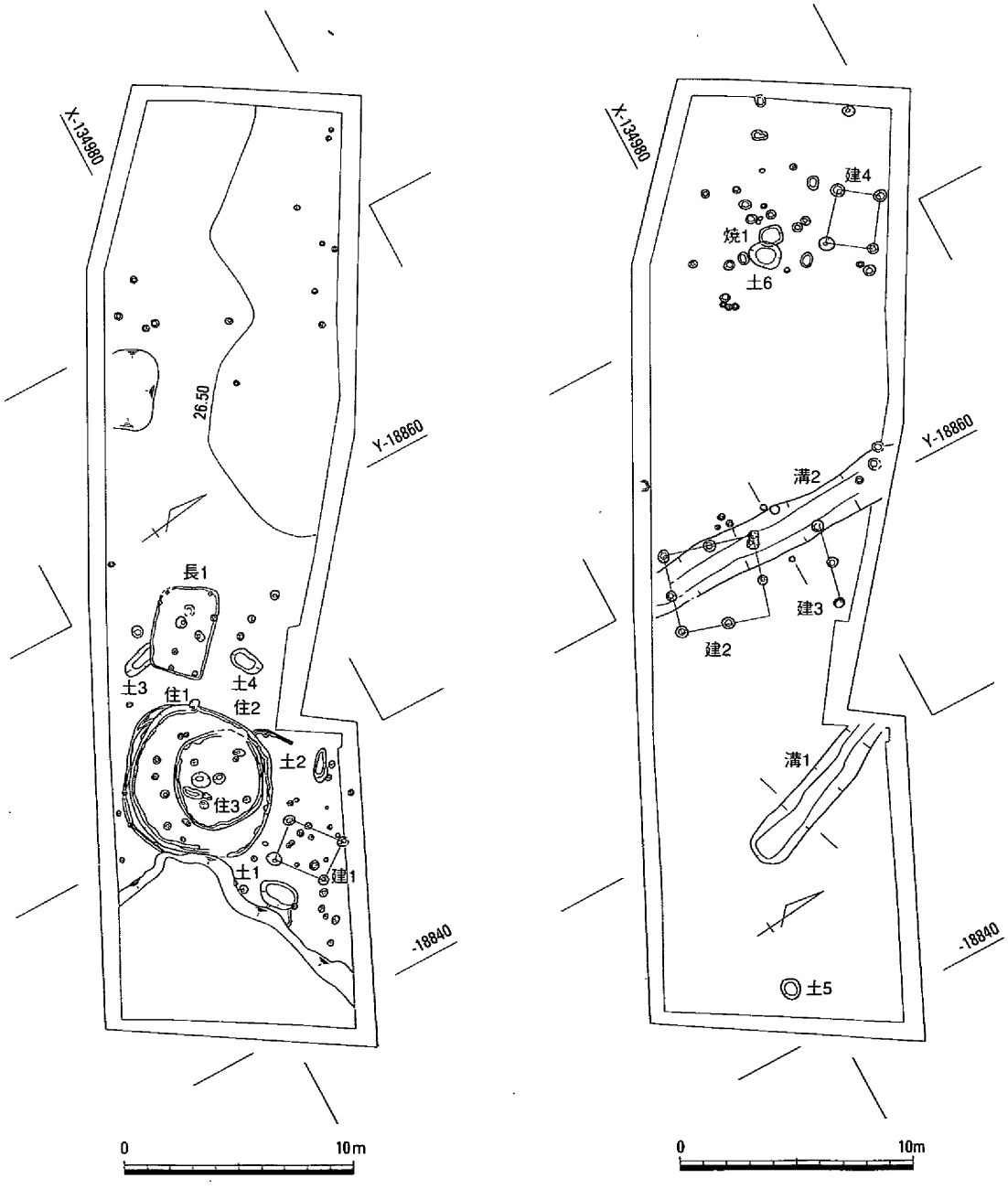
『土地分類基本調査　和気・播州赤穂』　岡山県　1981
熊山町史編纂委員会編『熊山町史』通史編　熊山町　1994
『全国遺跡地図　岡山県』　文化庁　1985

第3章　調査の概要

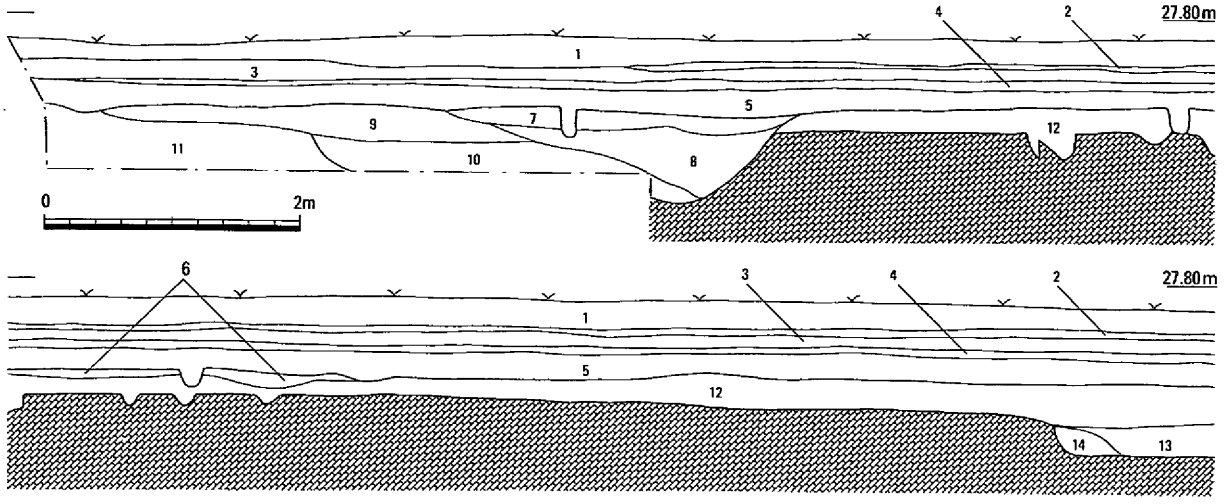
第1節　1　区

1　概要（第2・5・6・21図、図版1－1・2、3－3、4－1、12）

1区は熊山山塊から北へ張り出す丘陵が和田川と接する部分で、和田川が谷間から平地部へ向かっ



第5図　1区全体図（左：下層　右：上層）（1/300）



1　灰色(N5/0)土＝現耕作土
2　灰色(7.5Y6/1)砂質土＝耕作土床土
3　灰色(N6/0)砂質土〈含多Fe〉＝耕作土
4　灰色(N6/0)砂質土と黄褐色〈10YR5/6〉土の混層＝造成土
5　褐灰色(10YR6/1〉砂質土〈上部にMn沈着〉
　　＝包含層、下面が上層遺構面
6　褐灰色(10YR6/2)砂質土〈上部にMn沈着〉
7　灰黄褐色(10YR4/2)土〈上部にMn沈着〉＝河道堆積土
8　黒褐色(10YR3/1)～灰黄褐色(10YR5/2)粘質土～粘土＝河道堆積土
9　にぶい黄褐色(10YR5/3)土〈上部にMn沈着、含礫〉＝河道堆積土
10　にぶい黄褐色(10YR4/3)粗砂〈含多礫〉＝河道堆積土
11　にぶい黄褐色(10YR4/3)粗砂＝河道堆積土
12　褐灰色(10YR4/1)土＝包含層、下面が下層遺構面
13　褐灰色(10YR4/1)粗砂～粘質土＝溝２堆積土
14　灰黄褐色(10YR4/2)土＝溝２堆積土

第６図　１区南側壁東半土層図（1/60）

て形成した扇状地と丘陵との境に位置する。調査前は水田であったが、山際からは水田１枚分北側へ離れている。また、地形は南西から北東に向けて緩やかに下がっていく傾向にある。

調査区の土層断面を第６図に示した。地表には現在から近世の耕作土・造成土が40cm存在した。その下に第５層の古代～中世の包含層が堆積し、第５層の直下に丘陵側で標高27.0～27.1ｍに上層遺構面が存在する。

第７層から第11層は河道の堆積土である。この河道は東側から埋没したため、最終的には西岸に第７・８層のように溝状の部分が残ったようである。河道からは鉄鏃Ｍ１（第21図）、鉄滓が出土した。

第12層は弥生時代～古代の包含層で、この層の直下が下層遺構面である。第13・14層は溝２の埋土と考えられる。

第５図右側の全体図には、上層遺構面を中心に下層遺構面以降の時期の遺構を掲載している。後述するとおり、掘立柱建物２・３は室町時代の建物で上層遺構面の上に位置する。上層遺構面には、掘立柱建物４と焼土壙１、土壙５・６と溝１がある。溝２は長方形竪穴住居状遺構１を切る形で下層遺構面で検出された。

第５図左側に示した下層遺構面では、竪穴住居１～３、長方形竪穴住居状遺構１、掘立柱建物１、土壙１～４を検出した。遺構の項目では挙げていないが、竪穴住居２の北側で溝を１条検出している。幅は最大15cm、深さは最大10cmである。竪穴住居の壁体溝が残存しているかとも考えられたが、追求することができなかった。竪穴住居２と溝１に切られている。

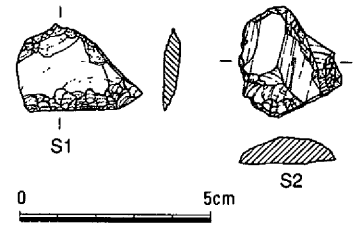
２　下層遺構面の遺構・遺物

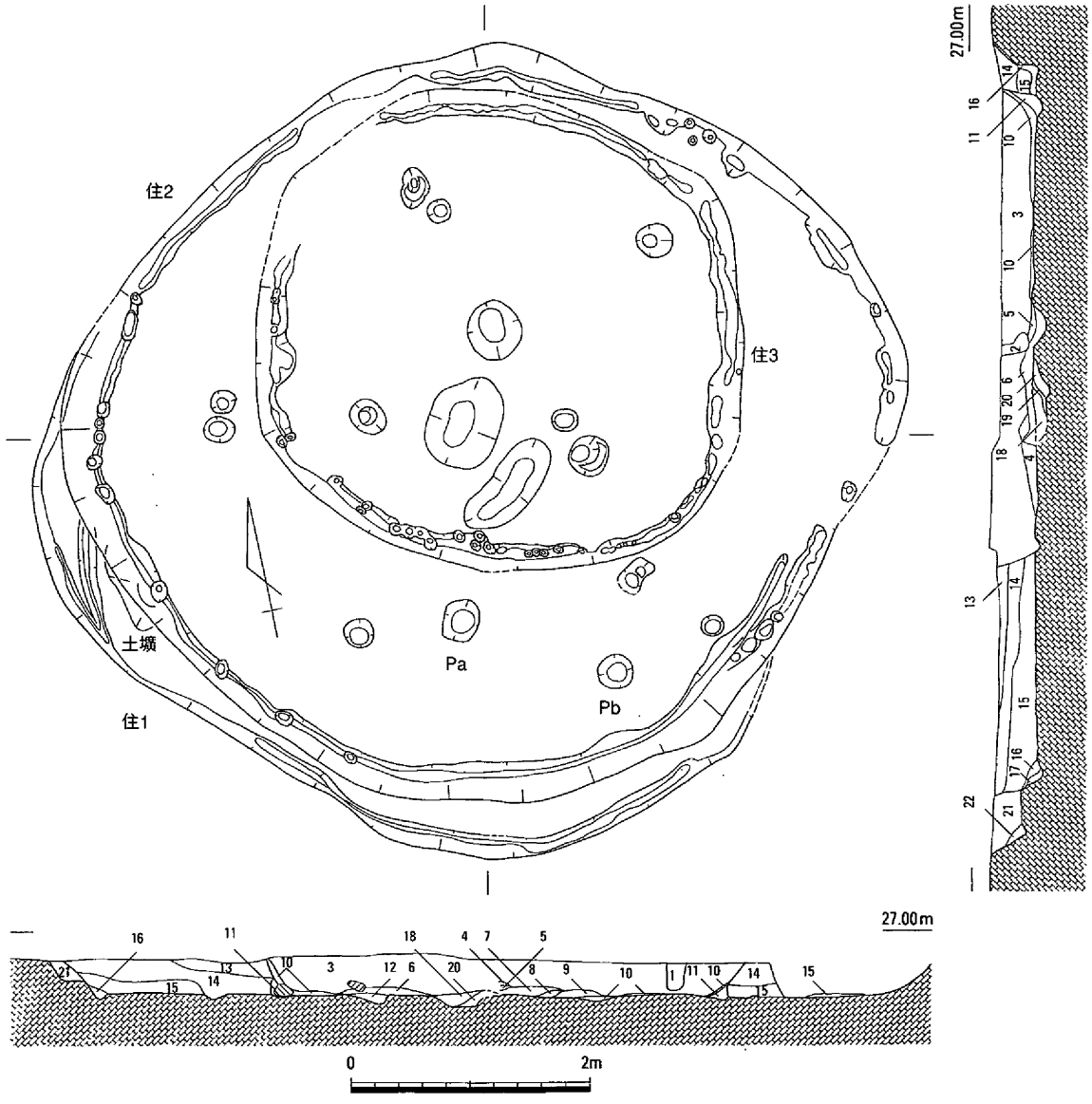
下層遺構面の遺構・遺物は、そのほとんどが弥生時代中期に属する。以下、遺構と包含層出土遺物について説明する。

竪穴住居1（第5・7図、図版12）

調査区南東部で検出された、隅丸方形を呈する竪穴住居である。住居本体は後述のとおり竪穴住居2に切られるため、ほとんど残っていない。深さは検出面から20cm程度残存していた。

埋土はにぶい黄褐色土で焼土・炭を含むが、基盤層と区別が困難であったため、当初は住居として認識できなかった。第7図に示し





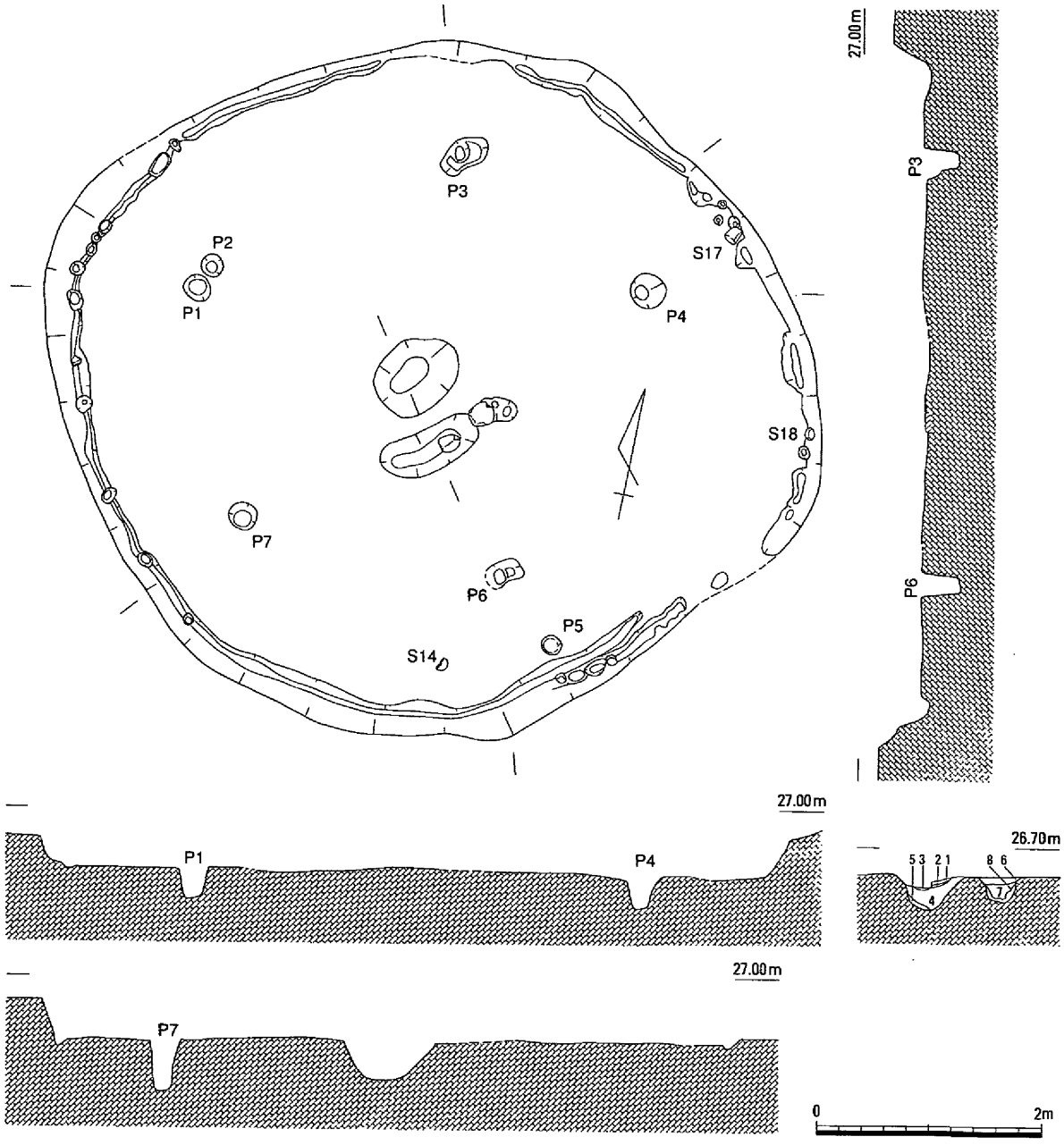
1　褐灰色(10YR5/1)粘質土〈含炭〉＝攪乱土
2　にぶい黄褐色(10YR4/3)土＝攪乱土
以下、3～12層は竪穴住居3埋土
3　にぶい黄褐色(10YR5/3)土〈含炭・焼土〉
4　灰黄褐色(10YR5/2)土〈含炭・焼土、上面一部に炭層〉
5　にぶい黄色(2.5Y6/1)土
6　灰黄褐色(10YR5/2)～明黄褐色(5YR5/6)土
〈部分的ににぶい赤褐色(5YR5/4)焼土〉
7　灰黄褐色(10YR5/2)土〈4層に近似〉
8　黄灰色(2.5Y4/1)土〈含多炭〉
9　赤褐色(5YR4/6)～にぶい黄褐色(10YR5/3)土
〈含多焼土、6層に近似〉
10　黒色(N2/0)炭層
〈一部に黄灰色(2.5Y4/1)土、8層に近似〉
11　暗灰黄色(2.5Y5/2)土〈含少炭〉
12　灰黄褐色(10YR4/2)土
以下、13～20層は竪穴住居2埋土
13　灰黄褐色(10YR4/2)土
14　にぶい黄褐色(10YR4/3)～黄灰色(2.5Y5/1)土
15　褐灰色(10YR4/1)～黄灰色(2.5Y4/1)土
16　黄灰色(2.5Y4/1)土
17　灰黄褐色(10YR5/2)土〈含少炭・焼土〉
18　にぶい黄色(2.5Y6/3)土〈5層に近似〉
19　黒色(N2/0)炭層〈10層に近似〉
20　にぶい黄色(2.5Y6/3)土〈5層に近似〉
以下、21・22層は竪穴住居1埋土
21　にぶい黄褐色(10YR6/4)砂質土〈含炭・焼土〉
22　にぶい黄褐色(10YR5/4)粘質土〈炭若干〉

第7図　竪穴住居1～3（1/60）・竪穴住居1出土遺物（1/2）

た切り合い関係が確認できたのちに、竪穴住居２よりも古い竪穴住居として調査した。

住居の施設として、壁体溝と土壙１基が確認できた。壁体溝は西側で２条に分かれる様子が確認できる。土壙は、西壁近くに位置し、褐灰色の埋土上部に焼土を多く含む層が存在した。また、この住居に伴うかどうかは不明であるが、竪穴住居２床面下からＰａ・Ｐｂの２本の柱穴を確認した。Ｐａの底面がＰｂより20cm低いことから、この２本の柱穴が同時に存在していた可能性は低い。

出土遺物は土器が少量と石器がある。図示できたのは２点の石器で、**Ｓ１**の調整のある剥片、**Ｓ２**の水晶製スクレイパーである。遺構の時期は遺物からは判断しにくいが、おそらく竪穴住居２とあまり離れていない弥生時代中期であろう。



1　にぶい赤褐色(5YR5/4)～明赤褐色(5YR5/6)焼土
2　黒色(N2/0)炭層
3　明黄褐色(10YR6/6)土
4　褐灰色(10YR4/1)土
5　黒褐色(10YR3/1)土
6　褐灰色(10YR4/1)土〈含炭〉
7　褐灰色(10YR4/1)土〈含多地山土塊〉
8　黒褐色(10YR3/1)土〈含焼土〉

第８図　竪穴住居２（1/60）

竪穴住居2（第5・7～9図、図版1－3、11－1、12）

調査区南東部に位置し、竪穴住居1より新しく竪穴住居3より古い竪穴住居である。ほぼ全体が確認できた。掘り方は検出面で最大7.1m、最小6.2mを測る楕円形を呈し、深さは最大40cmである。

埋土は第7図第13～15層の灰黄褐色土・にぶい黄褐色土・黄灰色土・灰褐色土で、これらは住居の外側から中央へ流れ込んだ堆積を示す。基盤層とは区別が容易であった。床面の高さは標高26.45mで貼り床は確認できなかった。

住居の施設として、壁体溝と柱穴、中央に中央穴と土壙1基が確認できた。壁体溝は検出が困難な部分があったがほぼ全周を巡るものと思われる。また、南東側で2条に分かれる様子が確認できた。壁体溝は、溝状の部分と小規模な柱穴状の部分からなり、柱穴状の部分は掘削されたというよりも杭の痕跡を想定した方が妥当であろう。

主柱穴はP1・P3・P4・P6・P7の5本である。直径30～45cmの円形または方形で、深さは20～45cmを測り、柱穴間の距離が2.1～2.8mとばらつきがある。

土壙は、北西側の円形に近いものを中央穴、南東側の楕円形のものを住居内土壙と呼称する。土層は、第1・2層が竪穴住居3に伴うもので、第4層は竪穴住居3使用以前に埋め戻されている層である。第5層が中央穴埋土と考えられる。第6層は竪穴住居2・3のいずれに属するか判断できなかったが、第7・8層が竪穴住居2に伴うものである。中央穴は80×60cmで深さ34cm、住居内土壙は90×37cmで深さ22cmを測る。住居内土壙内に赤色顔料が集積した部分が見られたので、採取して成分分析を実施したところベンガラのみが確認できた(1)。

出土遺物には土器と石器がある。土器は壺**1～4・6**、甕**5・7**、器台**8**などの小片が見られる。**3**はP1東の壁体溝直上からの出土であり、他は埋土中から出土している。

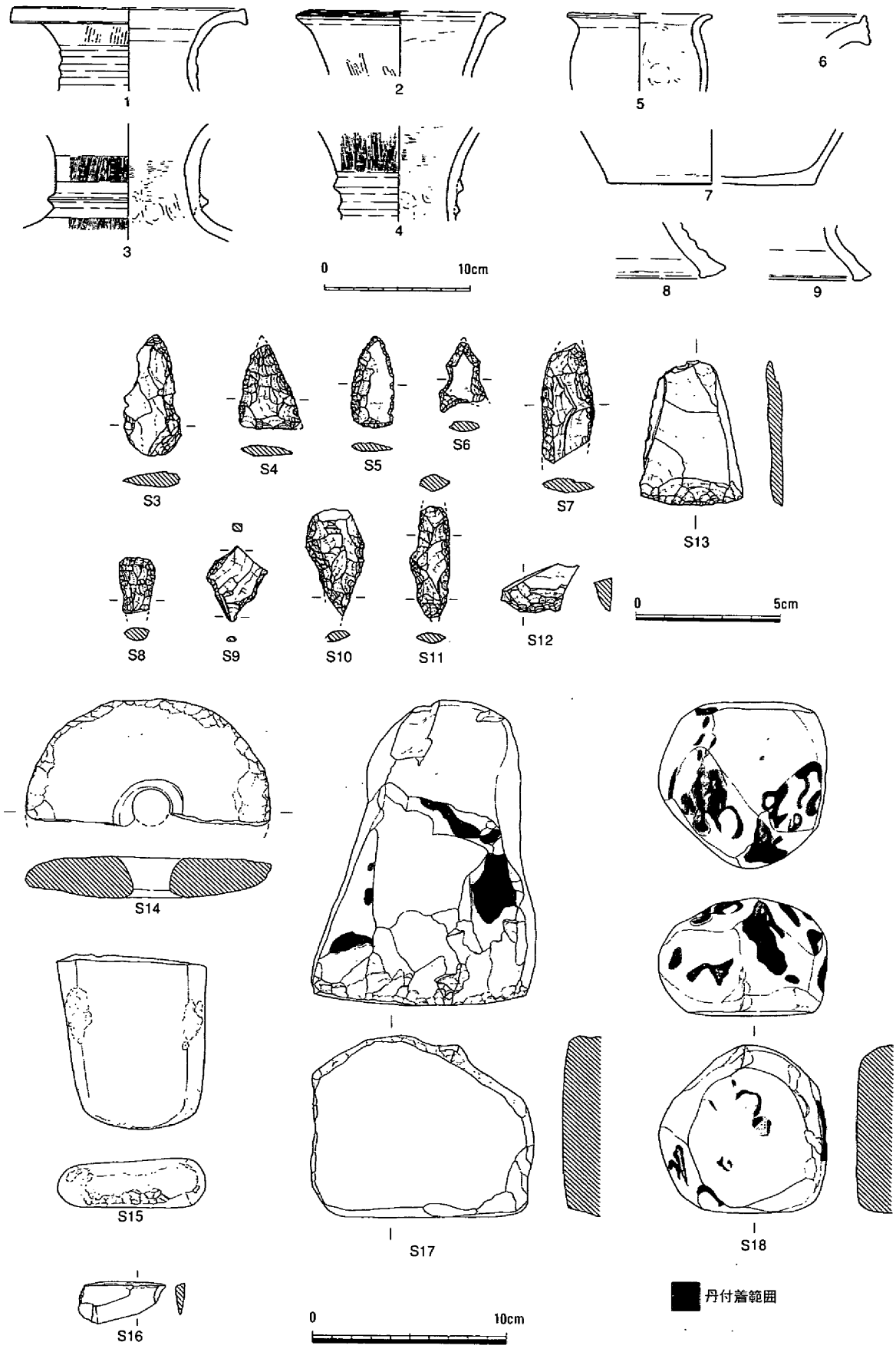
石器は16点を図示した。**S3～S6**が石鏃、**S7**は石槍かと思われ、**S8～S11**は石錐、**S12**は調整のある剥片であった。**S3～S13**は埋土中から出土している。**S14**はP6南側の床面付近で出土した環状石斧片である。**S15・S16**はいずれも床面から出土した。**S17**は壁体溝に接して床面から出土した杵である。出土状況は、作業面を住居の内側に向けた状態であった。作業面は1面のみで（図の下側に示した部分）、作業面と図示した側面に赤色顔料が付着する。作業面は水平でなく、図上側のように左右方向に丸く、中央部が出っ張っている。作業面に擦痕が認められ、図下側に表した作業面で上下方向に存在した。**S18**も杵で、壁体溝に接して床面から出土した。出土状況は、壁側に作業面を向けた状態であった。作業面は1面のみであるが、作業面だけではなくほぼ全面に赤色顔料の付着が見られる。作業面は中央部が少し出ている。なお、**S18**付着の赤色顔料は、成分分析の結果ベンガラのみを確認した。また、**S17**では成分分析はしていないがおそらくベンガラだろうということであった(1)。石器の材質であるが、**S3～S13**はサヌカイトで、**S14・S17・S18**は変輝緑岩系である。変輝緑岩は熊山付近に岩脈が存在するので、これらは遺跡付近で採取された可能性が高い。

遺構の時期は、遺物から弥生時代中期後葉の初め、いわゆる菰池式の後半と判断できる。

竪穴住居3（第5・7・10図、図版2－1・2、11－1、12）

調査区南東側に位置し、竪穴住居1～3の中では最も新しい竪穴住居である。埋土中に焼土・炭を多量に含む部分が存在し、部分的に炭化物の痕跡が見られることから焼失住居と考えられる。掘り方は検出面で直径4mを測る円形を呈し、深さは最大35cmである。

埋土は第7図の第3～12層で、第3層が焼失後の堆積土、第4～10層は焼失時あるいはその直後の

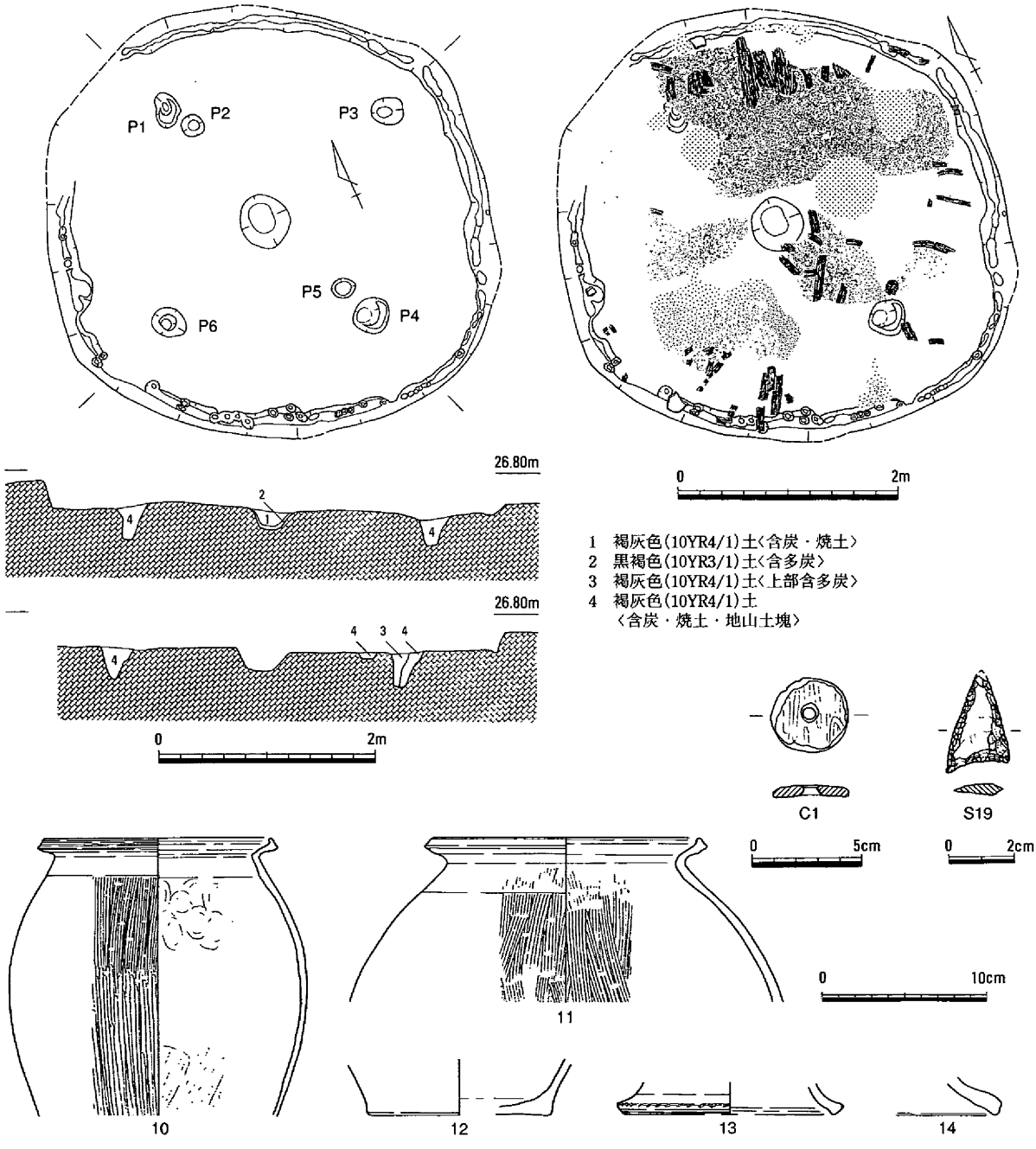


第９図　竪穴住居２出土遺物（1/2・1/3・1/4）

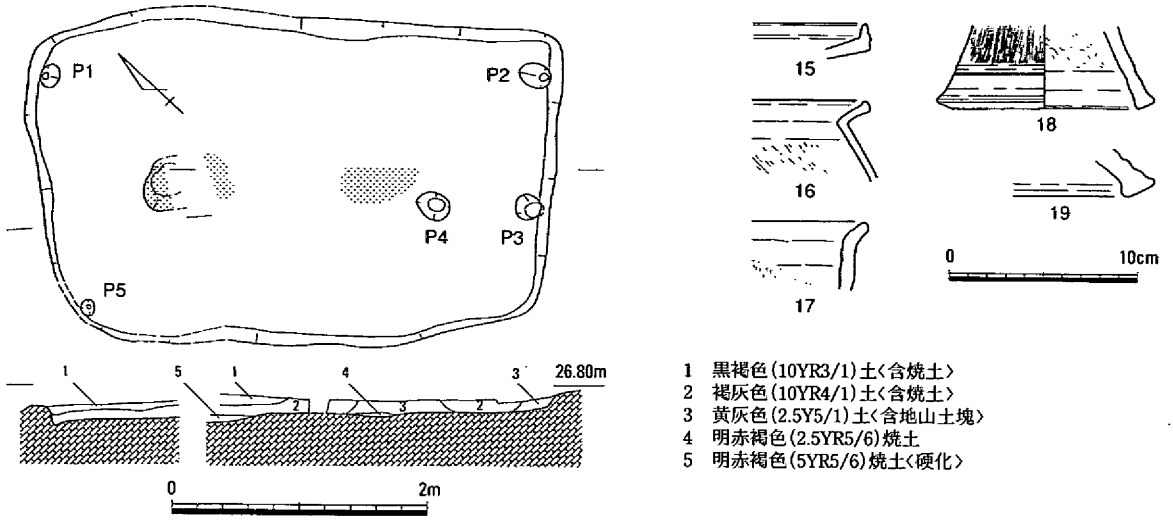
埋土、第11・12層は焼失以前の埋土である。特に第10層の炭を含む層が壁体溝付近で立ち上がる様子が観察された。床面の高さは標高26.45ｍで、竪穴住居２と同じく貼り床は確認できなかった。

焼失状況は、断面図に示したように床面から10cmの厚さで炭や焼土が存在した。平面図に点描した部分は焼土が見られる部分であるが、中央穴北側では弱い熱影響に焼土のブロックが混ざる部分が存在し、南側では北側より大きいブロック状の焼土が多く集まる部分がある。炭化物は、北側で板状の炭化物が南北方向に並び、その他の場所で棒状の炭化物が放射状に並ぶことが確認された。

住居の施設として、壁体溝と柱穴、中央に中央穴が確認できた。壁体溝はほぼ全周を巡り、溝状の部分と小規模な柱穴状の部分からなる。主柱穴はＰ１・Ｐ３・Ｐ４・Ｐ６の４本である。規模は直径が30～35cmの円形または楕円形で、深さはほぼ30cmを測る。柱穴間の距離は1.8～2.0ｍである。



第10図　竪穴住居３（1/60）・同炭化物検出状況（1/60）・出土遺物（1/2・1/3・1/4）



第11図　長方形竪穴住居状遺構１（1/60）・出土遺物（1/4）

床面上のＰ６周辺とＰ４に接する北側には、明赤褐色を呈してかなり強い被熱によって形成された焼土の範囲が確認されたが、いずれも焼失に伴う焼土面の可能性が高い。

中央穴は単独で存在する。直径45cmの円形で、深さは20cmを測る。土層は、第２層が炭を非常に多く含む層である。

出土遺物には土器と石器がある。壁体溝に接する床面から甕**10・11**が、床面から**S19**と**C１**が出土し、その他は埋土中から出土した。

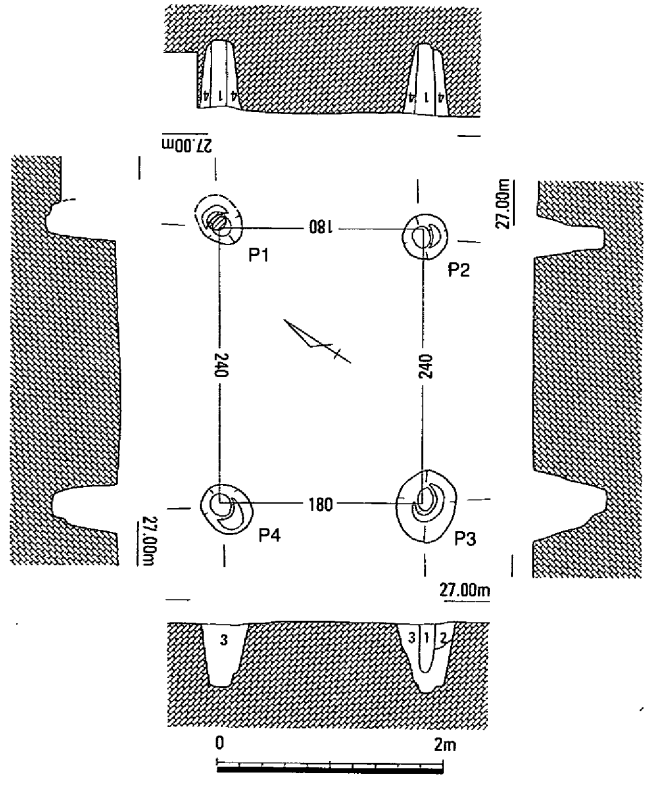
遺構の時期は、これらの遺物から弥生時代中期後葉の初め、いわゆる菰池式の後半と判断できる。遺物からは竪穴住居２との間に時期差はあまり認められない。

長方形竪穴住居状遺構１

（第５・11図、図版２－３、11－１）

竪穴住居１～３の北西に隣接する遺構である。掘り方は直線とは言い難いが、ほぼ長方形の外形を示すと思われる。長軸で4.1ｍ、短軸は2.65ｍで、深さは最大15cmを測る。なお、遺構の北３分の１と南３分の２は別々の調査工程で調査したため、長軸土層断面や焼土面が通して記録できなかった。埋土は焼土や炭を含み、複雑な堆積を示す。

柱穴はＰ１～Ｐ５を確認したが、Ｐ３の他は深さ10cm程度が残るのみである。Ｐ３は45cmの深さがあり、底面が上面に対して住居の外側へずれている。



第12図　掘立柱建物１（1/60）

床面には２カ所の焼土面が存在する。Ｐ４に近い南側の焼土面は、断面図の第４層に相当するもので柔らかい土質である。北側の焼土面は第５層に相当するが、硬くしまっていて強い熱影響を受けた可能性が高い。

出土遺物は土器があり、いずれも埋土中から出土した。**15**は壺の可能性もある。遺構の時期は、土器から弥生時代中期後葉の初め、いわゆる菰池式の後半に求められる。遺物からは竪穴住居３との間に時期差は認められず、同時に存在していた可能性が考えられる。

掘立柱建物１（第５・12図、図版３－１）

調査区東部、竪穴住居２・３の東に位置する１×１軒の掘立柱建物である。

柱穴の直径は35～55㎝、深さは50～60㎝を測る。柱痕が確認され、北東側のＰ１・Ｐ２では掘り方底面まで達している。Ｐ３では痕跡が途中で途絶えるように観察されたが、掘り方底面の形状からおそらくＰ１などと同じく柱は底面まで達していた可能性が指摘できる。

出土遺物は見られないが、おそらく竪穴住居１～３や長方形竪穴住居状遺構１と同じく、弥生時代中期の遺構と考えられる。

土壙１（第５・13図、図版３－２）

調査区東部に位置する。

平面形は1.75×1.05ｍの楕円形で、断面は緩やかな皿形を呈する。埋土は褐灰色土で、５～30㎝大の角礫と円礫が積み重なっていた。

遺物は見られず、時期は不明である。

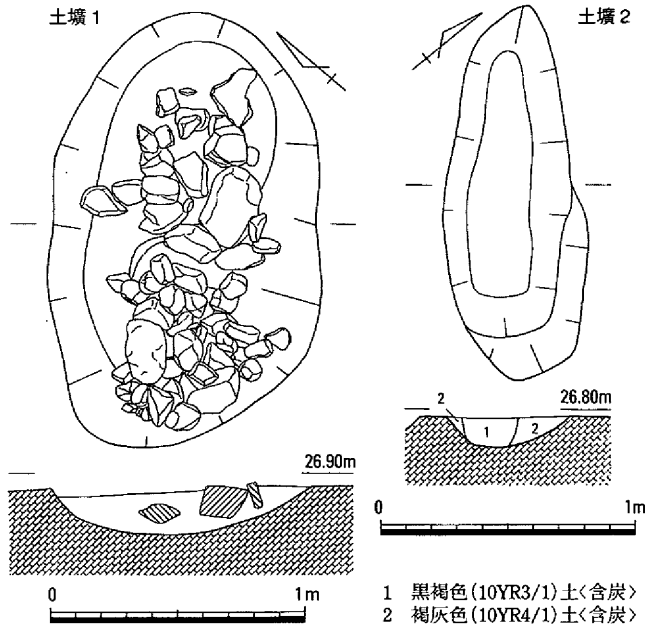
土壙２～４（第５・13～15図）

調査区東部で、竪穴住居２を取り囲むように位置する。

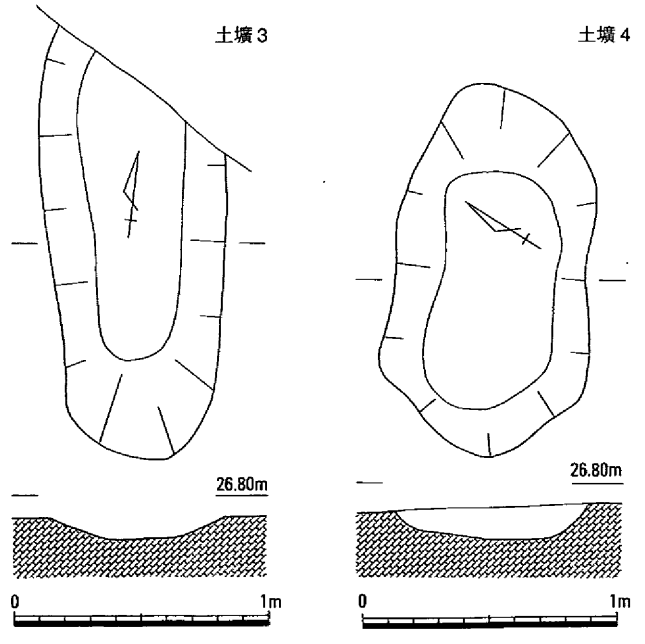
土壙２は竪穴住居２の北に位置し、平面は1.5×0.5ｍの楕円形で、断面は緩やかな台形を呈する。埋土は土器片を含み、基盤層に類似している。

土壙３は竪穴住居２の西に位置し、長方形竪穴住居状遺構１に切られている。平面は1.7以上×0.75ｍの楕円形で、断面は台形を呈する。埋土は灰黄褐色土で土器片を含み、基盤層に似る。遺物は第15図**47**の器台がある。

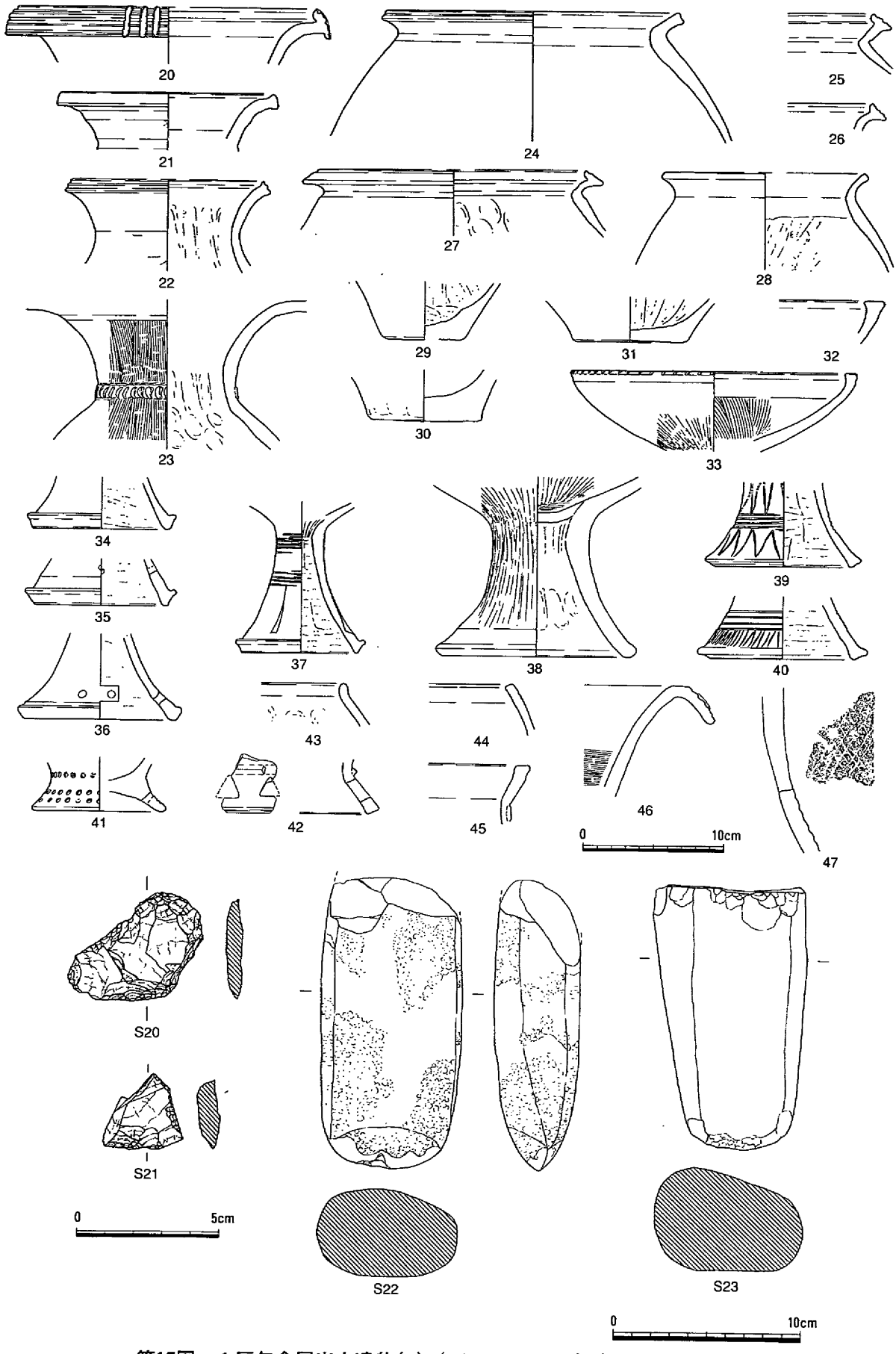
土壙４は竪穴住居２の北西に位置し、平面は1.48×0.8ｍの楕円形で、断面は緩やか



第13図　土壙１・２（1/30）



第14図　土壙３・４（1/30）



第15図　１区包含層出土遺物(1)（1/2・1/3・1/4）（**47**は土壙３出土）

な皿形を呈する。埋土は黒褐色土で炭と土器片を含む。

これら土壙２～４は、遺物から時期は弥生時代中期と考えられ、平面・断面の形状が類似することや、その配置から、竪穴住居２と同時に存在していた可能性が高い。

１区包含層出土遺物(1)（第15図、図版11－１、12）

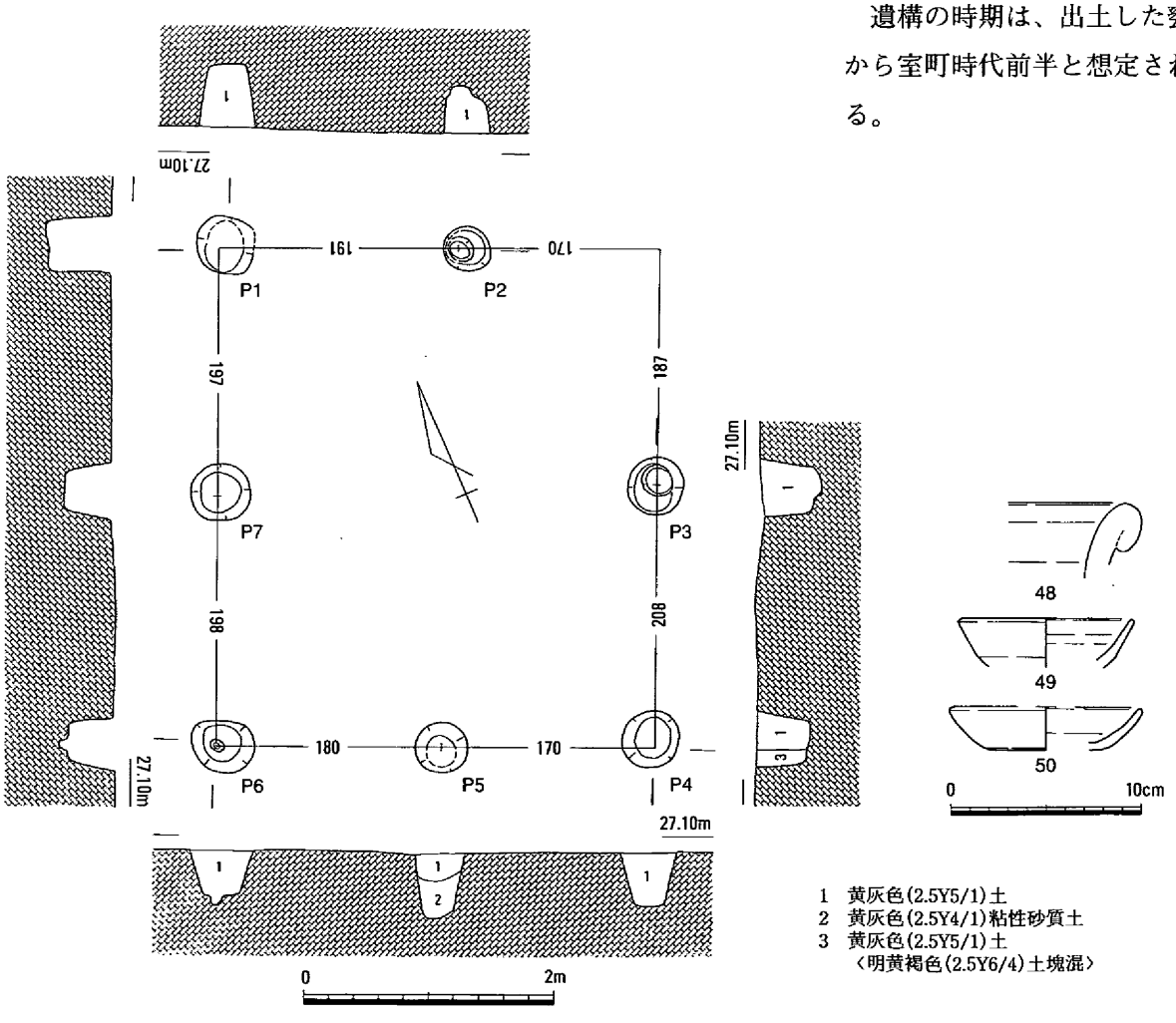
ここで取り扱う遺物は、上層遺構面より下で、下層遺構面までに出土したものである。弥生時代中期のものがほとんどを占めるものと思われる。この包含層の遺物は、いわゆる菰池式の後半と前山Ⅱ式～仁伍式、つまり弥生時代中期後葉前半と後半のものが見受けられる。菰池式の後半は、壺**23**や高杯**32**・**33**・**38**、器台**46**などがある。前山Ⅱ式～仁伍式は壺**20**、甕**25**～**27**、高杯**34**～**37**・**39**・**40**などが挙げられよう。高杯の脚部に沈線を巡らし三角形の透かしが入る**37**は新しい様相であるが、透かし孔が貫通していない。**35**・**36**の円形の透かし孔は古い様相である。

3　上層遺構面他の遺構・遺物

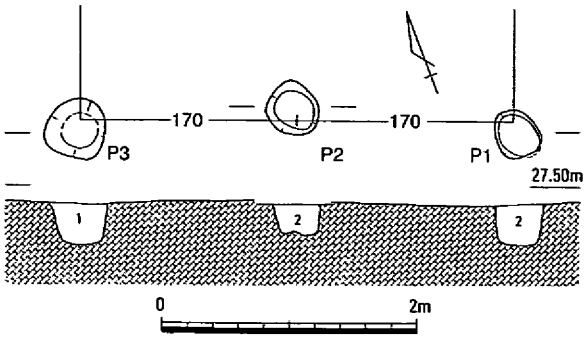
掘立柱建物２（第５・16図、図版４－２）

調査区のほぼ中央に位置し、上層遺構面の上部で確認された。北東の柱穴を１本欠くが、２×２間の建物になるものと思われる。柱穴の直径は40～50cm、深さは30～40cmで、底面の高さは26.5～26.6ｍを示す。備前焼の甕**48**がＰ１から、小皿**50**がＰ７から出土した。

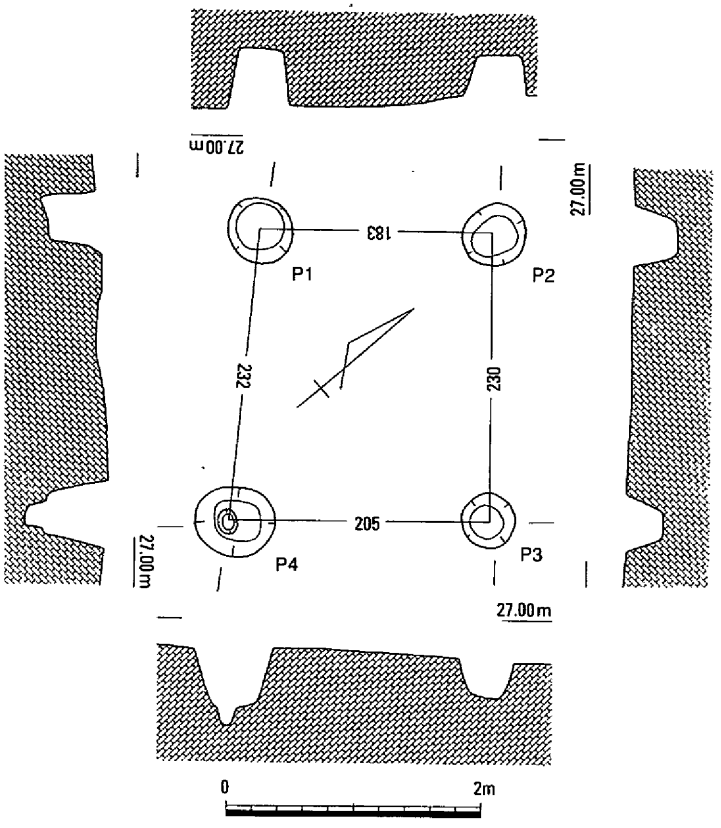
遺構の時期は、出土した甕から室町時代前半と想定される。



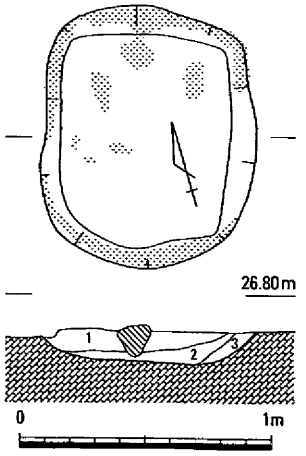
第16図　掘立柱建物２（1/60）・掘立柱建物２・３出土遺物（1/4）



1　黄灰色(2.5Y5/1)土〈明黄褐色(2.5Y6/4)土塊混〉
2　黄灰色(2.5Y5/1)土



第17図　掘立柱建物３・４(1/60)



1　灰黄褐色(10YR4/2)土〈含30cm大礫〉
2　灰黄褐色(10YR4/2)土〈含多炭、含礫〉
3　にぶい黄褐色(10YR5/3)土〈含炭〉

第18図　焼土壙１　(1/30)

掘立柱建物３

（第５・16・17図、図版４－２）

調査区のほぼ中央に位置し、上層遺構面の上部で確認された。掘立柱建物２の北側に、棟方向を同じくして位置し、調査区北側へ続く建物になるものと思われる。

柱穴の直径は30～50cm、深さは30～40cmで、底面の高さは26.5～26.6ｍを示す。

遺物は、備前焼の小皿**49**がＰ３から出土した。

遺構の時期は、配置と出土遺物から、掘立柱建物２と同時期と想定される。

掘立柱建物４（第５・17図、図版４－３）

調査区の北西部に位置し、上層遺構面で検出された。

１×１軒の建物で、規模と形態が掘立柱建物１に類似する。柱穴の直径は40～60cm、深さは30～60cmであるが、底面の高さは26.3～26.4ｍを示している。

時期の判明する遺物が出土していないので、時期は不明である。

焼土壙１（第５・18図、図版５－１）

調査区北西部に位置し、土壙６に切られる遺構である。

平面形は隅丸方形を示し、南北1.05ｍ、東西83cm、深さは13cmを測る。平面図の点描で示した部分が熱影響を受けており、灰白色と橙色を呈している。壁面は強い熱影響を受けて硬化しているが、底面の熱影響は弱い。

埋土中の遺物は少量で、時期はよく分からないが、おそらく焼土壙2に近い古墳時代後期の可能性が高い。

土壙5（第5・19図）

調査区東端、東側河道上に位置する遺構である。第6図の第11層で示した河道の堆積土中で検出したが、残存状況などから上層遺構面に近い時期に掘削された可能性も考えられる。

平面形は楕円形を示し、長軸90cm、短軸78cm、深さは10cmを測る。埋土は灰黄褐色で、炭を多く含んでいた。

遺物は少量で、時期はよく分からない。

土壙6（第5・19図）

調査区北西部に位置し、焼土壙1を切る遺構である。

平面形は楕円形で、長軸1.35m、短軸1.1m、深さは15cmを測る。埋土の色調は基盤層に似る。

遺物は少量で、時期はよく分からない。

溝1（第5・20図、図版5－2）

溝1は上層遺構面で検出された。調査区の途中から突然掘り始められた様子で、北端は調査区外へ延びる。

幅1.4～1.8m、深さは50cmを測り、南から北へ流れる。埋土には礫が密に詰まっていた。

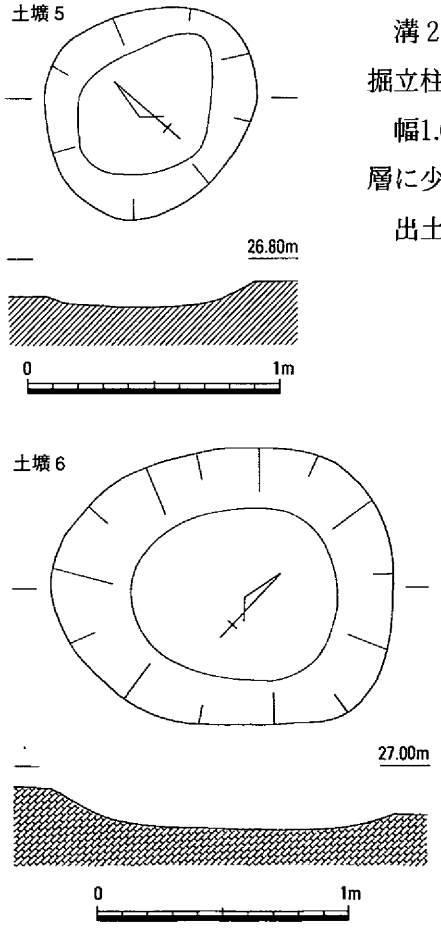
出土遺物は土師器が少量で、時期を決定するのは困難である。

溝2（第5・20図、図版5－3）

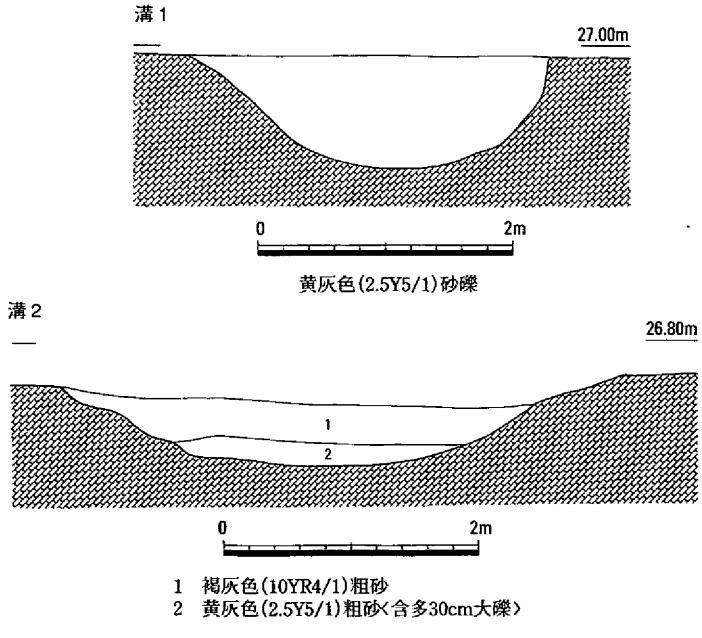
溝2は長方形竪穴住居状遺構1を切る形で下層遺構面で検出され、掘立柱建物2・3よりは古い。

幅1.6～2.0m、深さは30cmを測り、南から北へ流れる。遺物は第1層に少量含まれ、第2層は礫と砂が密に詰まっていた。

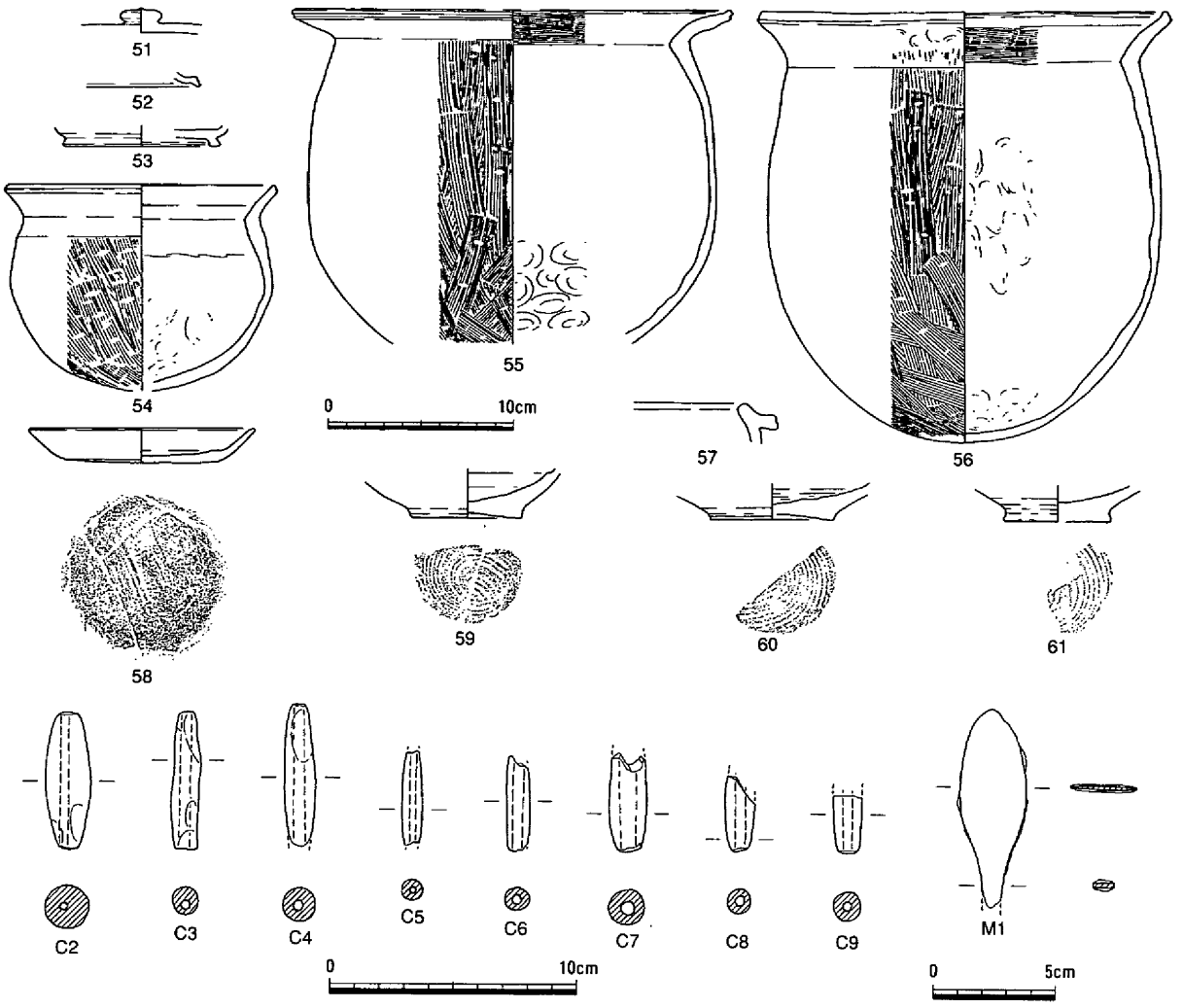
出土遺物は少量で、時期を決定するのは困難である。



第19図　土壙5・6（1/30）



第20図　溝1・2断面図（1/30）



第21図　１・４・５区包含層出土遺物（1/3・1/4）

１・４・５区包含層出土遺物（第21図、図版11－２、12）

ここで掲載した遺物のうち、**58・C5・C6**を除く遺物は１区上部遺構面より上の包含層と東端の河道から出土した。**58**の土師器皿は５区の包含層から、**C5・C6**の土錘は４区の暗渠から出土したものである。**52**の須恵器蓋、**57**の瓦質羽釜は１区西側の柱穴から出土し、**51**の須恵器蓋、**53**の須恵器杯、**55・56**の土師器甕は１区西側の包含層、**M１**の鉄鏃が１区東端の河道から、その他は１区西側の包含層出土である。

51～53は宝珠つまみの退化が少ないことやしっかりした高台から奈良時代前半の可能性が高い。**59～61**の須恵器は底面に糸切りを残し、平安時代後半であろう。

註

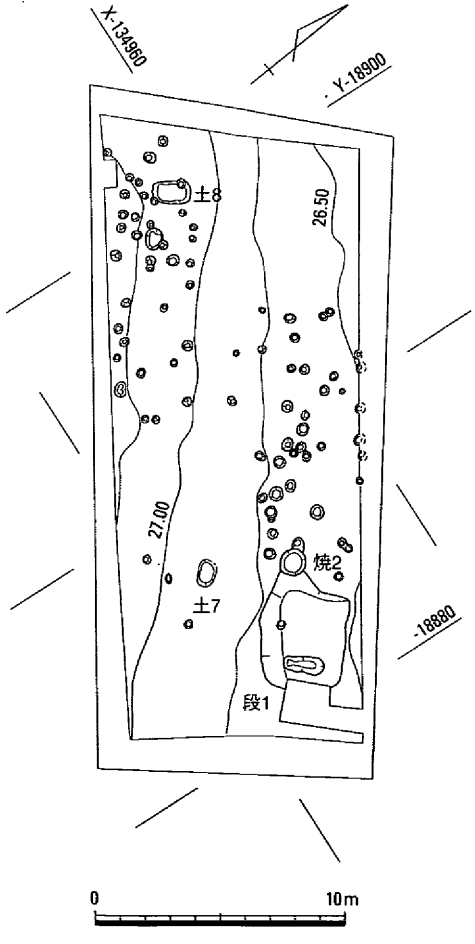
（１）　別府大学本田光子氏の同定による。

第2節　2　区

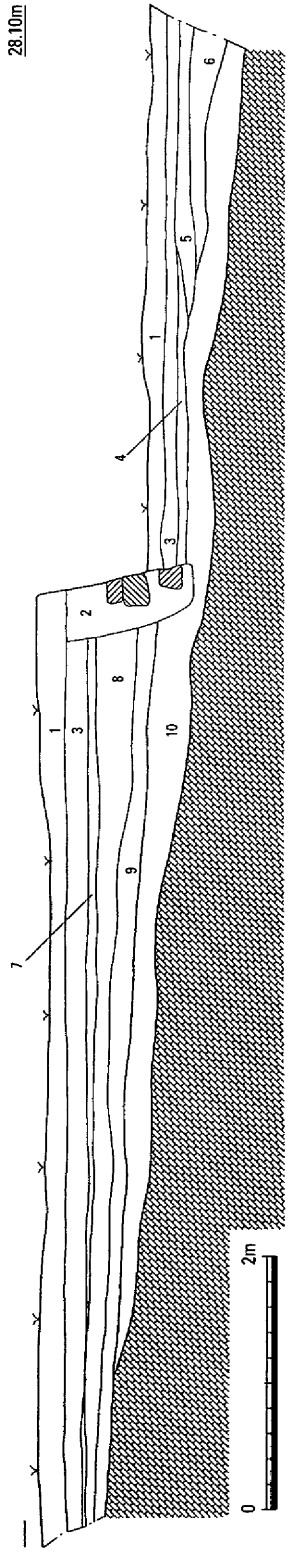
調査区の概要（第2・22・23図、図版6－1）

この調査区は、現状では90cm程の段差をもつ2枚の水田にまたがっており、境となる畦は調査区南東隅から西辺中央部に直線的に造られていた。第23図の第4・5層が下段水田の造成土、第7・8層が上段水田の造成土であり、第6・9層の自然堆積層までを重機によって除去した。なお、この調査区については、面積が小さいため、2分割せずに同時に調査している。

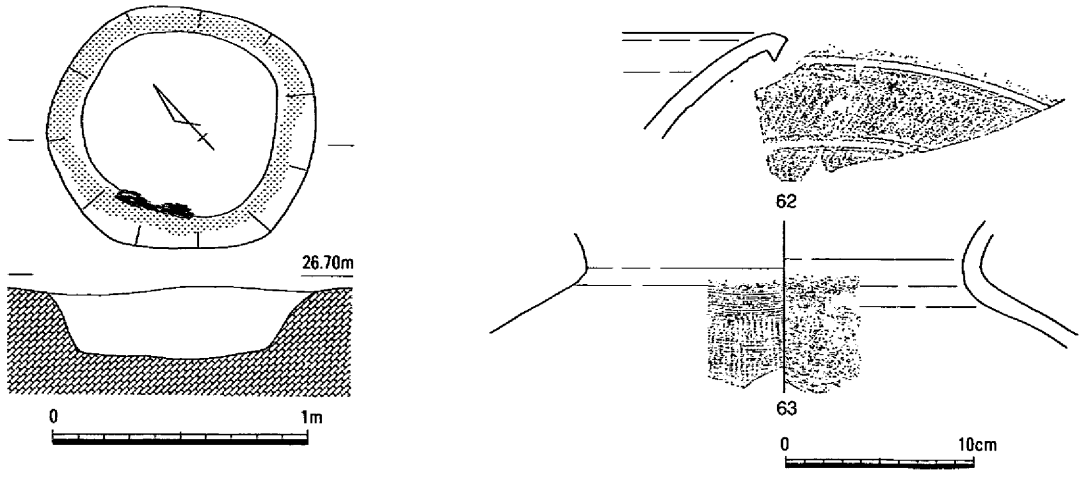
第10層は中世遺物の包含層であり、この上面が1区の上層遺構面に相当し、基盤層上面が下層遺構面に相当する。調査区の南北で1mの比高差があって、北へ下がっており、第23図の左端に見られるように、調査区の南西端では水田造成に際して第10層が削土されている部分もある。これらの部分では、上層・下層の区分が困難なため、第22図には両面の検出遺構を併せて示している。



第22図　2区全体図（1/300）



第23図　2区西側壁土層図（1/60）



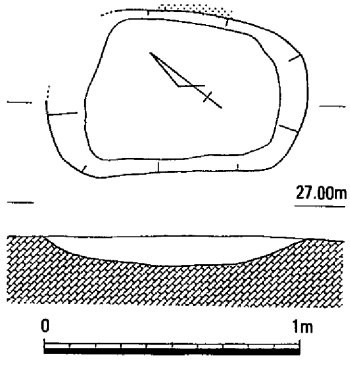
第24図　焼土壙２（1/30）・出土遺物（1/4）

検出された遺構は、焼土壙１基、土壙２基、段状遺構１基と多数の柱穴であるが、柱穴には弥生時代に限定できるものは少なく、時期を別にしても建物にまとめるには至らなかった。

焼土壙２（第22・24図、図版６－２、11－２）

調査区の東部に位置し、段状遺構１や柱穴を削っている。

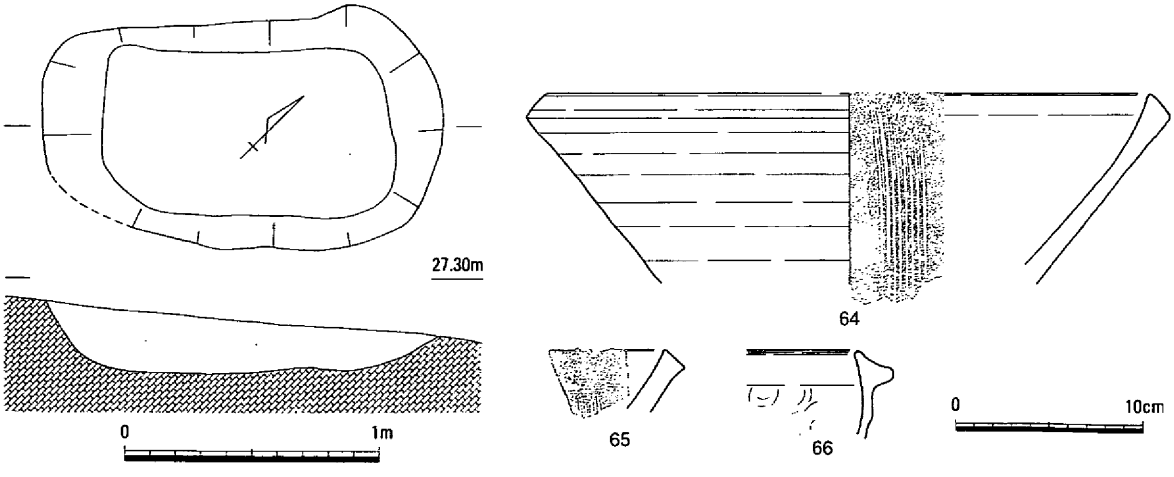
掘り方は、105×98cmの不整隅丸方形を呈しているが、北西辺はやや弧を描いている。90×70cmの隅丸方形の底面はほぼ平坦で、底面および側壁に粘土を貼ったような痕跡は認められない。高さ30cm弱の側壁は赤褐色に弱い熱影響を受けており、北東辺から南東辺には一部強い熱影響も認められる。



第25図　土壙７（1/30）

埋土は、底部に炭が多く堆積し、南西辺では長さ35cm程の大形片が検出されている。その上は３～20cm大の角礫を多量に含む黄灰色粘質土で埋められている。

須恵器の甕**62・63**の出土により、時期は古墳時代後半に比定される。



第26図　土壙８（1/30）・出土遺物（1/4）

土壙7（第22・25図）

調査区の東部に位置し、焼土壙2との距離2.5mである。

北隅を欠いているが、103×66cm程度の長方形に復元され、深さ12cm程度である。側壁北東辺の中央部に被熱痕跡が認められるが、側壁の傾斜が緩く、褐灰色土の埋土に炭の混入が少ないことから、焼土壙とは見なさず、土壙として扱う。

遺物は出土していないが、埋土から中世に下るものと考えられる。

土壙8（第22・26図）

調査区の西隅に位置し、長軸を斜面に直交させる。

長さ158cm、最大幅95cmの不整長方形を呈し、112×65cmの長方形の底面はほぼ平坦である。深さ30cm弱の埋土は暗黄褐色土で、備前焼の擂り鉢**64・65**や瓦質土器の羽釜**66**などが出土している。

時期は、鎌倉時代に比定される。

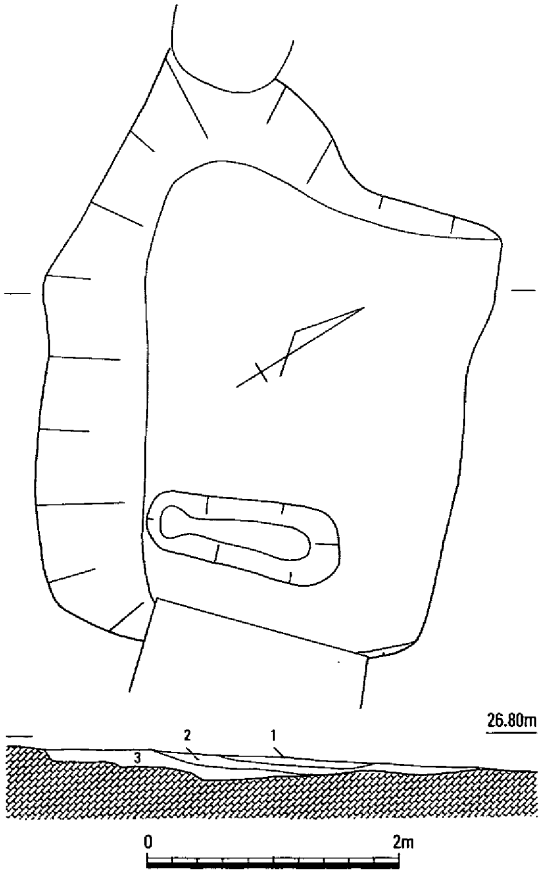
段状遺構1（第22・27図、図版6－3）

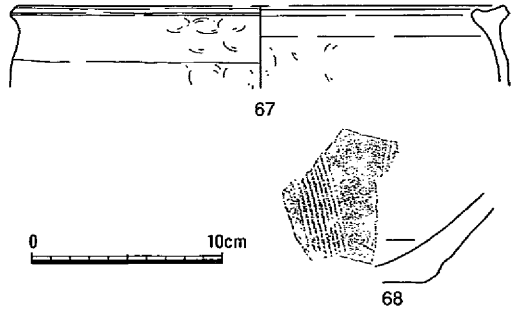
調査区の東隅に位置し、西隅を焼土壙1に削られ、南東辺を確認調査T5によって失っている。緩斜面を掘り込んで平坦面を造り出そうとする形状から、遺構の種類を段状遺構としたが、弥生時代にみられる同名の遺構とは異なるものである。

平面形は不整長方形を呈し、最大長4.6m、最大幅3.4mを測る。側壁から底面にかけての境界は明瞭でなく、3.5×2.7mの範囲に設定した底面についても平坦ではない。底面には熱影響の痕跡は見られず、柱穴と考えられるものもないが、南東寄りのところに160×60×7cmの規模で長楕円形の浅い窪みが長軸を遺構の短辺に平行させて検出された。

3層に分けられる埋土の内、第1層は水田の造成土と考えられ、第2層は第22図において第6・9層として自然堆積層と考えた土層に相当して、瓦質土器の羽釜**67**や備前焼の擂り鉢**68**は第2層への混入とみなされる。

時期は、焼土壙1との関係から、古墳時代後半に比定される。





1　黄灰色(2.5Y5/1)土〈含炭〉＝造成土？
2　黄灰色(2.5Y5/1)～にぶい黄灰色(2.5Y6/4)土
3　黄灰色(2.5Y5/1)土〈含炭〉

第27図　段状遺構1（1/60）・出土遺物（1/4）

第３節　３　区

調査区の概要（第２・28・30図、図版７－１・２、12）

現状は１枚の水田であるが、その北隅では北側の農道と最大２ｍの段差を形成しており、確認調査Ｔ４の状況からも大規模な盛り土による水田造成が想定された。また、２区の水田面より１ｍ以上低いことから、１区から続く丘陵上面は終わって、斜面へ地形変化を見せることも予測された。

調査は西半を先に行ったが、予想どおりに水田造成土が厚く、北へ下がる斜面には上面に包含層も形成されない状態で、遺構は皆無であった。ただし、その斜面で環状石斧**S24**が単独で出土している。

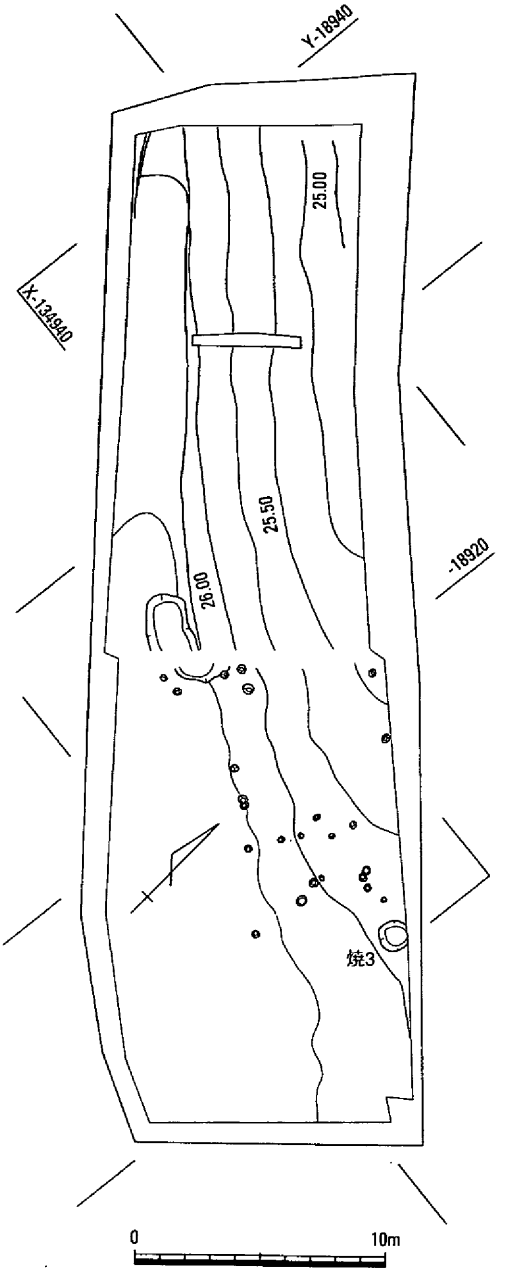
東半は、北寄りの部分が斜面の旧地形を残すのに対して、南半は削土されて水田床土直下で水平面を呈した。斜面へ移行する肩口では、焼土壙１基の他に、建物にはまとめ得なかったものの、いくつかの柱穴も検出され、丘陵上の遺構群がこの辺りまで続いていたことが想定される。

焼土壙３（第28・29図、図版７－３）

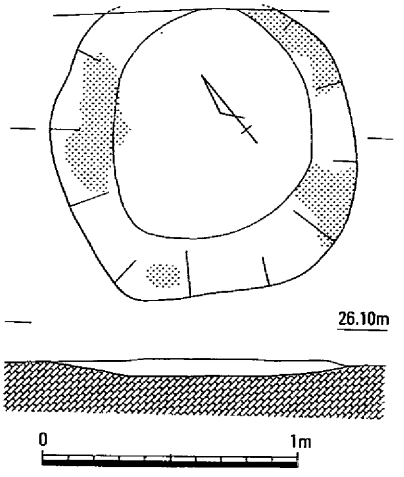
調査区の北東部で、斜面肩口に検出された。

北端を側溝で失っているが、平面形は不整隅丸方形に復元され、１辺115㎝程度を測る。85×75㎝の楕円形に設定される底面はほぼ平坦で、緩く傾斜する側壁とともに部分的に薄く浅黄色の粘土が貼られ、これに弱い被熱痕跡が認められる。深さ７㎝ほど残る埋土は、灰褐色土で炭は若干認められる程度である。

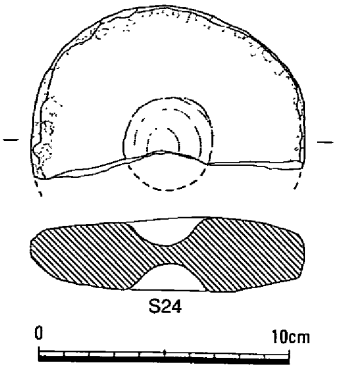
遺物は伴わず、時期を決定できないが、焼土壙１・２・４に比べて側壁の立ち上がりが緩く、炭の量が少ないことなどから、他の３例とは時期・性格を異にする遺構とみなすべきかもしれない。



第28図　３区全体図（1/300）



第29図　焼土壙３（1/30）



第30図　３区包含層出土遺物（1/3）

第4節　4　区

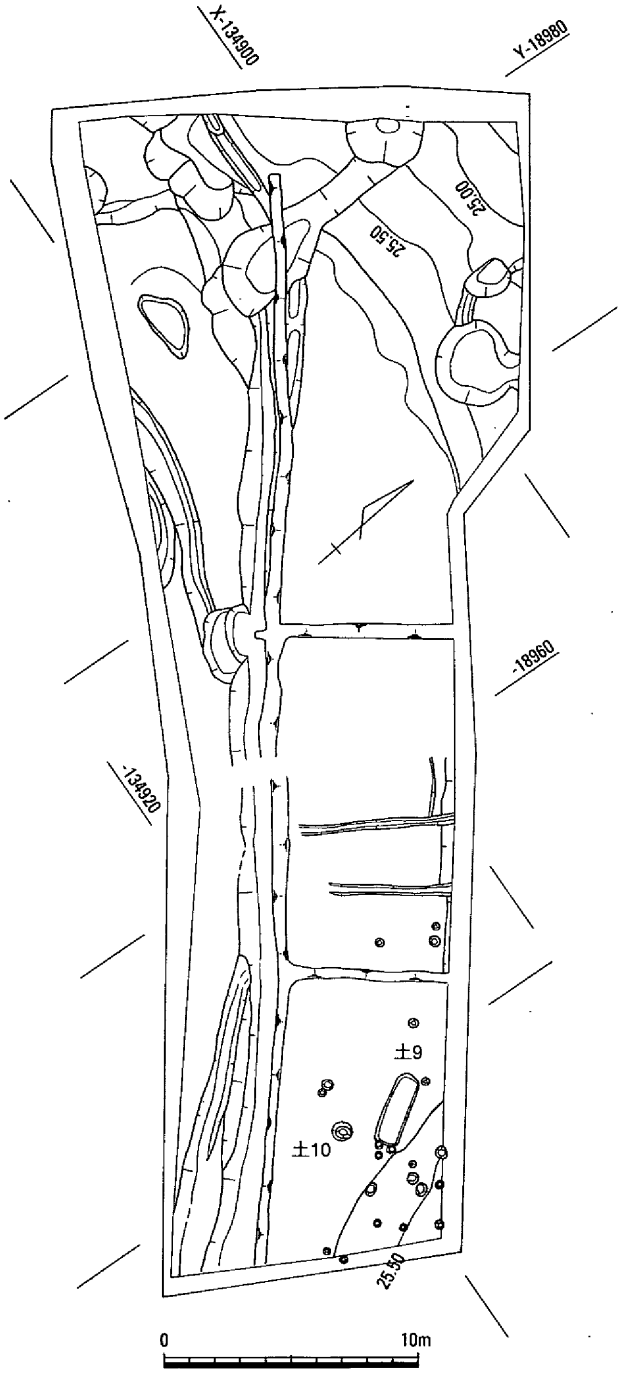
調査区の概要

(第2・31・32・34図、図版8－1・2、12)

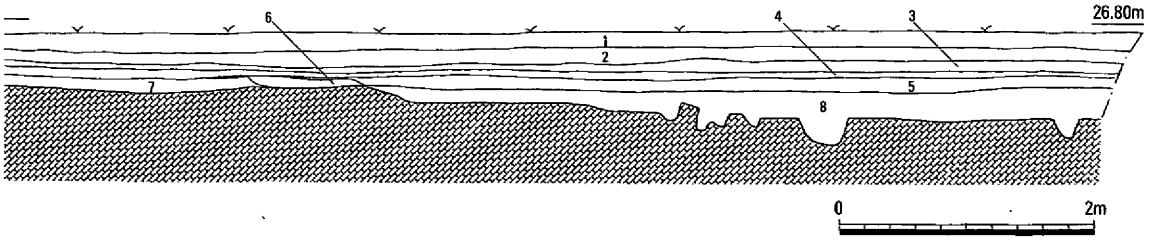
現状は、比高80cmほどの2枚の水田で、境の畦は第31図の中央を縦に走る暗渠の位置である。確認調査の試掘溝は入れていないが、南側に尾根が張り出していることから、3区とは逆に水田造成はこの尾根を削土して行われたであろうことが想定された。

調査は西半を先に行った。この範囲の北部では、丘陵斜面の旧地形が残っており、水田造成も盛り土によって行われていたが、南東部は予想どおりに斜面を削土して平坦面が形成されており、旧地形はまったく残っていなかった。

上段では弧状を描く浅い溝が2条検出されたが、これらは現状で水田域の最高所を東から西へ流れる農業用水の前身がこの位置に設けられた時期があることを示すものと理解された。水田の境には石垣が積まれていたが、その直下にこれに沿う暗渠が掘られ、これに直交して谷に向かう暗渠も認められた。この暗渠は、山からの湧水を逃がすための施設と考えられ、北部の旧斜面にいくつか見られる径2mほどの窪みとこれから谷方向へ伸びる溝状の部分は、古い湧水地点の状況を示すものと考えられる。



第31図　4区全体図 (1/300)



1　灰色(N5/0)土＝現耕作土
2　明黄褐色(10YR6/6)土〈Fe顕著〉＝床土
3　黄灰色(2.5Y6/1)土＝床土
4　第2層に同じ＝近世
5　灰黄色(2.5Y6/2)土＝近世
6　灰黄色(2.5Y7/2)土＝近世
7　灰黄色(2.5Y7/2)土＝近世
8　黒褐色(2.5Y3/1)土＝中世包含層

第32図　4区北側壁東半土層図 (1/60)

東半では、上段の状況は西半と同様で、水田床土直下で削土された平坦面となり、旧農業用水の溝は重なりながら南東方向に続く状況が確認されて、この弧状の描く形状が尾根の張り出しの旧状を示すものと理解された。

下段では、東部で旧地形の緩斜面が残り、その上面に中世遺物の包含層も認められた。第32図の第８層が包含層であり、第５～７層が水田造成土である。東半のうちでも西寄りの部分は削土されており、暗渠の続きの他に、谷方向へ暗渠に平行する浅い溝が２条検出されている。包含層上面でいくつかの柱穴が検出され、基盤層上面で土壙２基と柱穴が確認された。太型蛤刃石斧**S25**は、包含層に混入したものである。

土壙９（第31・33図、図版８－３）

調査区の東隅で、斜面肩口の包含層下で検出された。

平面形は長方形を呈し、長さ293cm、幅100cmを測って、長軸を等高線に平行させている。深さ15cmほどの埋土は灰褐色土で、遺物を含まない。265×80cmの長方形の底面はほぼ平坦である。

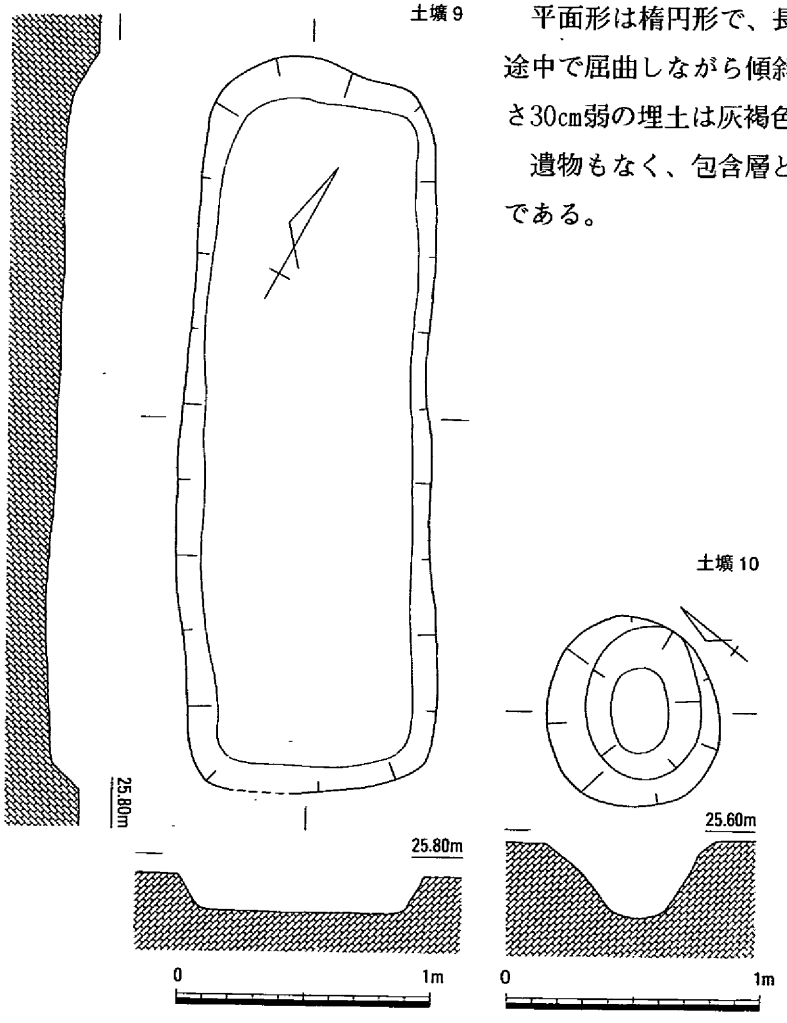
時期を決める遺物はないが、包含層の下で検出された状況から、古墳時代後半以前としておく。

土壙10（第31・33図）

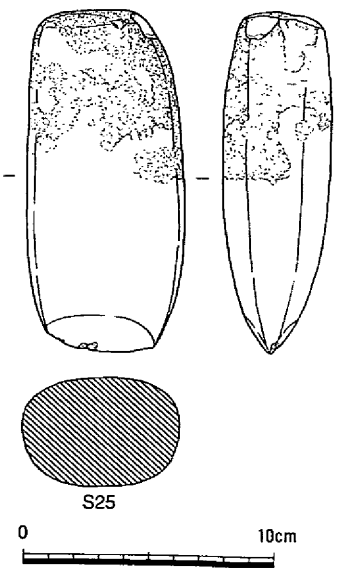
調査区の東部に位置し、土壙９との距離90cmで、上面に包含層は見られず、削土された基盤層での検出である。

平面形は楕円形で、長径75cm、短径67cmを測り、側壁は途中で屈曲しながら傾斜して、33×22cmの底面に至る。深さ30cm弱の埋土は灰褐色土で、遺物は出土していない。

遺物もなく、包含層との関係も不明なため、時期は不明である。



第33図　土壙９・10（1/30）



第34図　４区包含層出土遺物（1/3）

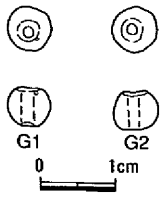
第5節　5　区

調査区の概要（第2・35・36図、図版9－1・2）

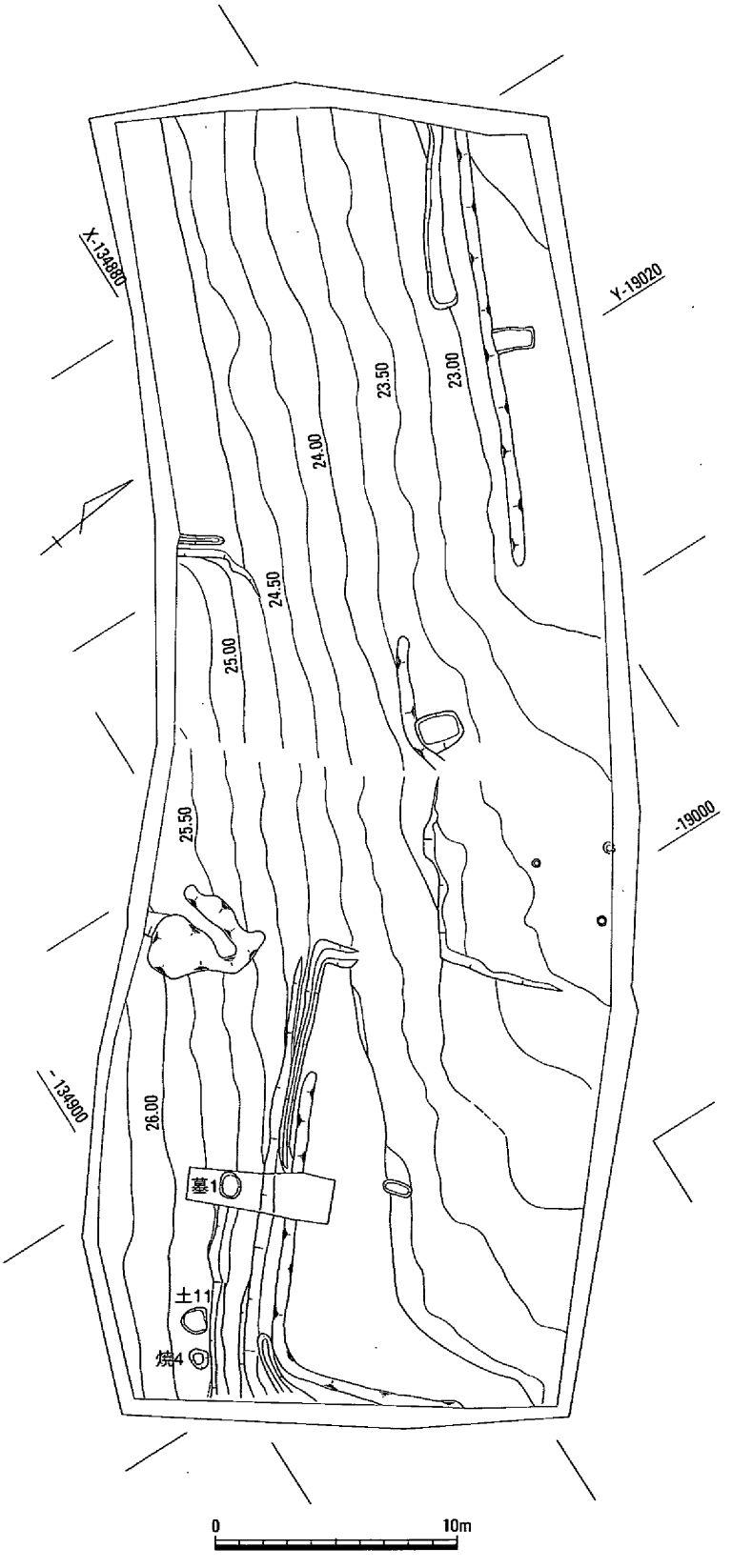
調査範囲は、6枚の水田にまたがり、最高位の水田面と最低位のそれとは高低差が3mを越えているが、確認調査では、T3がそれらの境界の石垣の一つを切って設定され、斜面にも遺構が存在することを示していた。

調査は西半から行ったが、丘陵斜面裾部の旧地形を検出したのみで、遺構は認められなかった。西半の北辺では、海抜23m辺りに傾斜の変換点があるが、この位置は現在の水田の境界とも一致し、暗渠が掘られるなど、旧地形の反映かどうかは不明であり、その北側にも遺構は認められなかった。

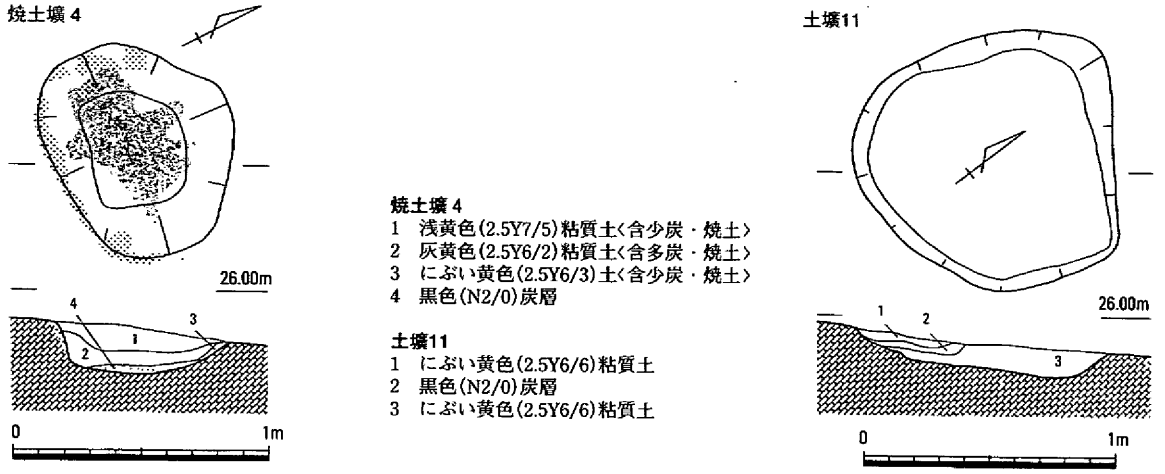
東半においては、現水田の境界に合致する斜面削土の痕跡が大きく2カ所で確認され、基盤層が平坦になった部分がある。東側の削土範囲の山際には、湧水除去のための暗渠が巡らされている。それ以外の部分は、北へ下がる旧地形の斜面形状をとどめており、焼土壙・土壙・近世墓がそれぞれ1基ずつ検出されたほか、低い地点に柱穴3本も所在する。



第35図　5区包含層出土遺物（1/1）



第36図　5区全体図（1/300）



第37図　焼土壙４・土壙11（1/30）

ガラス玉２点**G１・G２**は、中央付近の斜面から出土したが、明瞭な遺構には伴っていない。

焼土壙４（第36・37図、図版９－３）

調査区南東隅の斜面に位置し、土壙11との距離は50cmである。

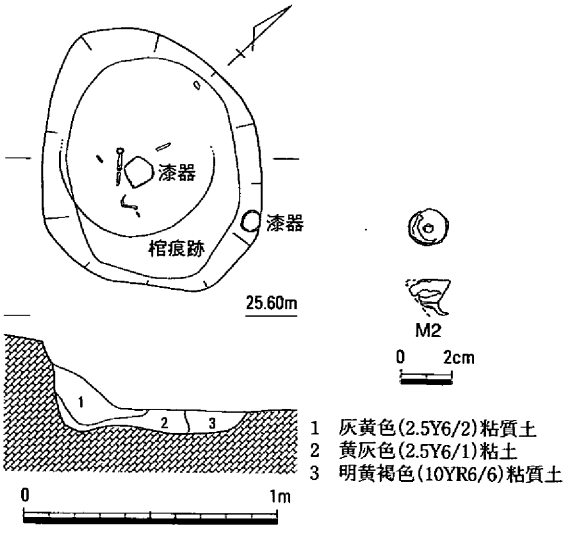
平面形は北側の辺が膨らんだ不整楕円形を呈し、長さ88cm、幅70cmを測る。45×37cmの規模に認識した底面はほぼ平坦で、高さ20cm弱の側壁は東辺と北辺の傾斜が緩くなっている。底面上には厚さ３cmほどの炭の堆積が認められ、北辺を除く各側壁に熱影響の痕跡が認められた。埋土上層の３層にも炭・焼土が含まれていた。北辺については、被熱が認められず、傾斜が緩いことから、後に損壊を受けている可能性がある。

遺物がなく、時期は不明であるが、遺構の形状は焼土壙１・２に近いものと理解される。

土壙11（第36・37図）

調査区南東隅の斜面で検出された。焼土壙４と高度は同じである。

平面形は不整方形で、長さ110cm、幅102cmを測り、深さ10cm強で、底面は傾斜している。３層に分けられる埋土から遺物は出土していないが、遺構の南部では中間層に炭層が認められ、焼土壙４との共存も想定される。



第38図　近世墓１（1/30）**・出土遺物**（1/3）

近世墓１（第36・38図、図版10－１、12）

調査区の南東部に位置し、確認調査Ｔ３内で検出された。

平面形は不整方形で、長さ１ｍ、幅85cmを測る。85×65cmの底面はほぼ平坦で、高さ30cm強が残る山側の側壁は急角度で立ち上がる。粘土化した木棺痕跡は山寄りに置かれ、径60cm強の円形である。棺内から銅製の煙管**M２**と漆器が出土し、棺外からも漆器が出土している。

煙管の出土によって、近世以後と判断され、位置が水田の境界に近いことから、開田より前と考えられる。

第6節　6　区

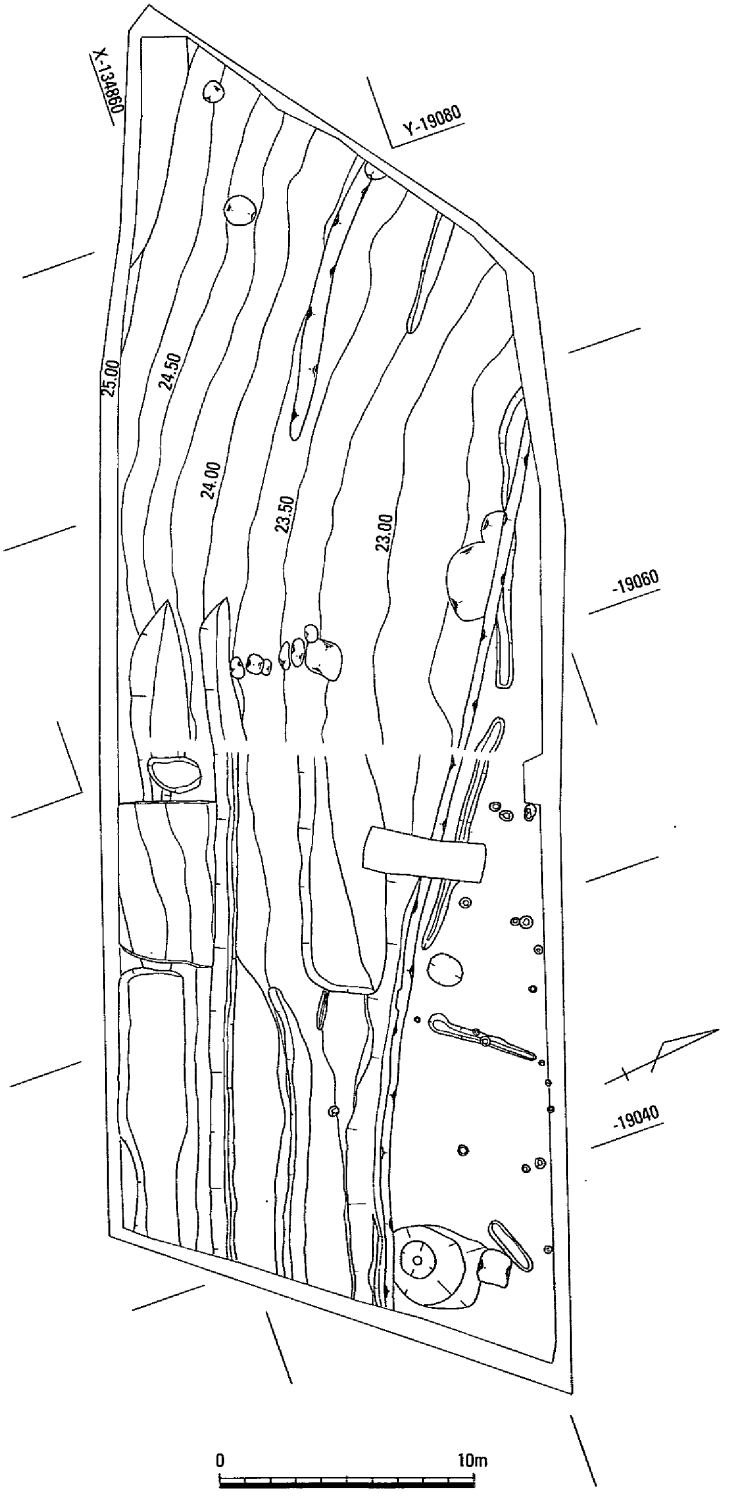
調査区の概要（第2・39・40図、図版10－2・3）

調査前の状況は、等高線に平行して細長く造られた6枚の棚田となっており、最高所と最低位の水田とは2.4mの高低差があった。このため、特に調査区の東半では、水田造成に伴う切り土・盛り土が激しく、旧地形の斜面形状をとどめる部分の方が少ないほどであった。

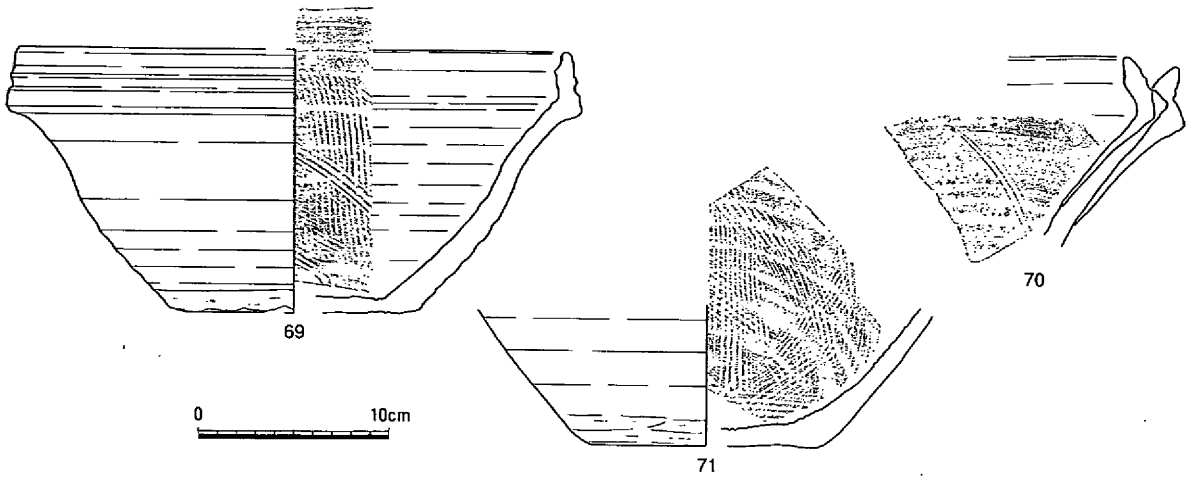
調査は西半を先に行い、後に東半を実施した。西半のほとんどは、丘陵から北へ下がる斜面裾部の形状を呈し、北端で現水田の区画境に相当する暗渠を検出し、その北側は狭い平坦面となっていた。

東半については、南3分の2は、尾根斜面の裾部としての旧地形を示すのに対して、現状で1枚の水田となっていた北辺の一帯では、削土による平坦化が認められ、山際に沿って設けられた西半から続く暗渠は、これに先行する溝と重複を見せ、そのうちの1本の溝は直交して谷方向へ掘られていた。

さらに、この平坦な部分においては、10数本の柱穴が検出され、中央部の何本かを結ぶ線は、緩い弧を描く暗渠と平行または直交する向きを示している。このことから、あるいはこの平坦面が水田の造成を目的としたものではなく、掘立柱建物によって構成される施設のために、敷地造成を行ったものかとも考えたがこれ以上の検討材料は得られなかった。



第39図　6区全体図（1/300）



第40図　6区包含層出土遺物（1/4）

これらの柱穴はほとんど遺物を伴っていないため、その時期を明確にすることはできないが、調査区東端に位置する擂り鉢状の窪みから第40図に示した備前焼の擂り鉢**69～71**が出土している。

窪みは平坦面での開口部径約3ｍ強の不整円形で、側壁は2段階の傾斜変化を見せながら深さ70cmで径30cmほどの底面に至る。人為的なものであることは間違いないが、性格は不明である。

この備前焼擂り鉢は、口縁端部内面に段をもち、放射状のスリメの上から斜行するスリメが施されるなど、近世初頭の特徴を示している。平坦面造成の時期をこの頃に求めることが可能であろう。

同様の特徴を示す備前焼擂り鉢は4区の水田区画境に施された暗渠からも、多量に出土しており、現水田の景観はほとんど近世にはできあがっていたこととなる。また、6区においても暗渠との切り合い関係で先行する状況が確認された浅い溝については、この水田造成に先行するものであり、山裾の開田時期は中世段階に求められる可能性をもつ。

第４章　まとめ

第１節　弥生時代の遺構・遺物

弥生時代の遺構が検出されたのは１区のみであるが、３区・４区でも遺物は出土している。これにより、弥生時代の集落は１区から２区にかけての緩斜面を呈する丘陵上に営まれたことが想定され、４区の南側の緩斜面にもその可能性を残すが、後者については石器１点のみで、丘陵上からの斜面廃棄物の転落もみられないことからその可能性は低いものと思われる。この１区周辺の集落の広がりについては、南は水田１枚分の平坦面で尾根端部のやや急な斜面となっていて、これが南限となる。東側は１区東端部の河道によって削られ、確認調査のＴ７～10においても、流土堆積を確認したのみで、不明である。北側へは丘陵が続き、集落も広がっていたものと想定される。

１区において検出された遺構は、竪穴住居３軒、長方形竪穴住居状遺構１軒、掘立柱建物１棟、土壙４基である。このうち、竪穴住居３軒は重複しており、同時併存はない。竪穴住居と長方形竪穴住居状遺構との関係をみると、相互の距離が近いが、竪穴住居３はかろうじて併存できようか。竪穴住居１・２からほぼ等距離で、これを囲むように配置された土壙２～４については、土壙３が長方形竪穴住居状遺構１に切られることからも、竪穴住居１・２との併存に可能性を見出せる。掘立柱建物１は、竪穴住居との併存は考えがたい。このように、弥生時代の集落は、竪穴住居１～３と掘立柱建物１の４段階にわたって集落が営まれたことが判る。

この４段階は、中期後半の中に収まるようで、これに先行する遺物も特になく、下層遺構面を覆う包含層中にも後期の遺物はみられない。

竪穴住居２からは、ベンガラの加工に関する資料が出土しており、注目される。住居中央に近い住居内土壙ではベンガラの集積箇所がみられ、壁際からは２点の石杵が出土している。住居内土壙から出土した河原石については、臼の可能性を検討したが、研磨痕も認められず、ベンガラの付着もないことから否定された。石杵については、**S17**の凸面を呈する磨面はいわゆるＬ字状石杵に分類され、手のひらに納まる**S18**についても、形状こそＬ字形を示さないものの、棒状石杵よりはＬ字状石杵に近いものとみなしうる。今回の赤色顔料の鑑定を依頼した本田光子氏の研究(1)によれば、Ｌ字状石杵の類例は、石臼を伴わず、内面に赤色顔料の付着する鉢形等の土器を伴うとされており、竪穴住居２の出土土器について観察を加えたが、ベンガラの付着する土器はみられなかった。

県内での赤色顔料加工具としての石杵の出土例は、岡山市西端の津寺遺跡１例・足守川加茂Ａ遺跡３例・足守川加茂Ｂ遺跡２例が知られている。このうち、足守川加茂Ａ遺跡２例、足守川加茂Ｂ遺跡１例のＬ字状石杵は、いずれも凸面の磨面をもち、重量も1.43～2.16Kgを測って、本遺跡**S17**の2.29Kgに近い数値を示しており、その大きさ・重量において、200g前後の重量しかない他者と明確に区別される。足守川加茂Ａ遺跡および足守川加茂Ｂ遺跡では、水銀朱とベンガラの２種類の赤色顔料が検出されている中で、ベンガラを検出した２点がともにこの３例に含まれることは、本遺跡例との共通点といえよう(2)。ただし、足守川加茂Ａ遺跡・足守川加茂Ｂ遺跡の出土例は古墳時代前期に比定

されるもので、空間的のみならず時間的にも大きな距離をもっている点は、比較の前提として指摘されなければならない。

水銀朱も含めた赤色顔料の加工については、縄文時代から各地で報告されており、岡山県内では岡山市百間川原尾島遺跡から出土した内面に赤色顔料の付着した弥生時代後期初頭の土器が知られているが、本遺跡例はこれより遡るものとなった。

第2節　古墳時代以降の遺構・遺物

1区から4区東端で確認された中世遺物包含層には、弥生時代中期の遺物は含まれるものの、弥生時代後期から古墳時代の遺物がほとんどみられない。前節に述べたように、弥生時代も後期には集落が途絶えたようで、調査範囲内にその形跡を見出せない。

古墳時代においても、集落そのものの所在を指摘する材料はないが、須恵器を出土した焼土壙が2区で検出され、同種の焼土壙は1区・5区でも確認されている。3区の焼土壙3は、遺構の形状が他者とやや異なるため、同時期かどうか疑問が残るが、焼土壙1・2・4は古墳時代後半に属する可能性が高いものと考えられる。この種の焼土壙については、総社市窪木薬師遺跡例(3)をはじめとして多くの類例が知られており、鍛冶用の炭窯との見解が有力になっている。

前述の中世遺物包含層からは鉄滓も出土しており、肉眼観察で製錬滓と鍛冶滓の両者が認められたため、それぞれについて成分分析を実施した結果、やはり椀形鍛冶滓と砂鉄原料の炉外流出滓と考えられる数値が得られている。第2章に紹介したように、吉井川対岸には9世紀初頭に製鉄を行っていた和気町石生天皇遺跡が所在し、水口遺跡周辺にも数カ所の鉄滓散布地が知られる状況から、焼土壙の存在と合わせ考えると、古墳時代後期に調査範囲周辺で鍛冶操業が行われたことが想定できる。

熊山山上の帝釈山霊山寺に伴うとされる善坊に関する遺構・遺物については、これと特定できるものはみられなかった。1区で検出された掘立柱建物2・3は、時期を室町時代前半に想定したが、仏教関連の遺物は出土しておらず、善坊関連遺構とみなしきれない。調査範囲より北の平地に所在したものであろうか。

前章第6節において、備前焼の説明から水田造成の時期を考えたが、現在の水田景観は近世以降にできあがったもので、開田は中世段階に遡る可能性をもつものと思われる。ただし、これは4区以西について想定されるもので、3区東半以東の丘陵上面については、少なくとも室町時代前半までは水田化されていない。

註

(1)　本田光子・成瀬正和「付載3.足守川遺跡群出土の石杵と土器に付着の赤色顔料について」島崎東他『足守川河川改修工事に伴う発掘調査　足守川加茂A遺跡・足守川加茂B遺跡・足守川矢部南向遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書94　岡山県教育委員会　1995

(2)　(1)に同じ。

(3)　島崎東『窪木薬師遺跡　前川河川改修工事に伴う発掘調査』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書86　岡山県教育委員会　1993

土器観察表

掲載番号	出土地区	遺構・土層名	種別	器種	計測値(cm)			色調	状態	形態・手法の特徴など
					口径	底径	器高			
1	1区	竪穴住居2	弥生土器	壺	(15.7)	—	—	7.5YR7/3	口頸部1/6以下	
2	1区	竪穴住居2	弥生土器	壺	(12.4)	—	—	10YR6/2	口頸部1/5	
3	1区	竪穴住居2	弥生土器	壺	—	—	—	2.5YR5/6	頸部1/6以下	貼り付け突帯1条。
4	1区	竪穴住居2	弥生土器	壺	—	—	—	5YR5/4	頸部1/5	貼り付け突帯2条。
5	1区	竪穴住居2	弥生土器	甕	(9.4)	—	—	10YR6/4		外面被熱。
6	1区	竪穴住居2	弥生土器	壺	—	—	—	7.5YR7/3		口縁部外面凹線3条。
7	1区	竪穴住居2	弥生土器	甕	—	14.4	—	10YR8/2	底部1/7	
8	1区	竪穴住居2	弥生土器	器台	—	—	—	2.5YR5/6		外面凹線3条。
9	1区	竪穴住居2	弥生土器	(脚)	—	—	—	10YR7/2		
10	1区	竪穴住居3	弥生土器	甕	17.0	—	—	7.5YR6/3	口～胴部1/4	口縁部外面凹線2条。外面煤付着。
11	1区	竪穴住居3	弥生土器	甕	16.2	—	—	10YR7/2	口～胴部1/5	胴部内面縦ハケ目。外面煤付着。
12	1区	竪穴住居3	弥生土器	甕	—	11.0	—	10YR8/3	底部1/8	
13	1区	竪穴住居3	弥生土器	高杯	—	(12.6)	—	5YR5/4	脚裾部1/8以下	脚端部刻み目。
14	1区	竪穴住居3	弥生土器	(脚)	—	—	—	10YR7/4		
15	1区	長方形竪穴住居状遺構1	弥生土器	高杯？	—	—	—	5YR6/6		口縁部外面凹線3条。
16	1区	長方形竪穴住居状遺構1	弥生土器	甕	—	—	—	5YR5/4		胴部内面縦ハケ目。
17	1区	長方形竪穴住居状遺構1	弥生土器	鉢	—	—	—	10YR3/1		胴部外面横ミガキ。
18	1区	長方形竪穴住居状遺構1	弥生土器	(脚)	—	9.8	—	5YR5/6	脚部1/7	
19	1区	長方形竪穴住居状遺構1	弥生土器	器台	—	—	—	2.5YR5/6		脚部外面凹線2条。
20	1区	包含層	弥生土器	壺	(20.8)	—	—	7.5YR6/3	口縁部1/8以下	口縁部外面凹線5条、棒状浮文3本。
21	1区	包含層	弥生土器	壺	(14.8)	—	—	7.5YR6/4	口縁部1/4以下	頸部外面凹線。
22	1区	包含層	弥生土器	壺	(13.4)	—	—	2.5Y5/1	口縁部1/4以下	口縁部外面凹線2条。
23	1区	包含層	弥生土器	壺	—	—	—	5YR6/6	頸部1/2	頸部下端貼り付け突帯に刻み目。
24	1区	包含層	弥生土器	甕	20.4	—	—	2.5YR6/8	口縁部1/2	内外面剥落。
25	1区	包含層	弥生土器	甕	—	—	—	7.5YR6/3		口縁部外面凹線3条。
26	1区	包含層	弥生土器	甕	—	—	—	5YR7/6		口縁部外面凹線4条。
27	1区	包含層	弥生土器	甕	(19.5)	—	—	5YR6/6	口縁部1/6	口縁部外面凹線2条。
28	1区	包含層	弥生土器	甕	(14.0)	—	—	7.5YR6/4		外面煤付着。
29	1区	包含層	弥生土器	(底部)	—	5.0	—	5YR6/6	底部ほぼ完	外面剥落。
30	1区	包含層	弥生土器	(底部)	—	7.5	—	10YR6/3	底部ほぼ完	内面ナデ。
31	1区	包含層	弥生土器	(底部)	—	7.6	—	5YR6/6	底部1/2	外面剥落。
32	1区	包含層	弥生土器	高杯	—	—	—	2.5YR5/6		口縁端部刻み目。
33	1区	包含層	弥生土器	高杯	20.0	—	—	2.5YR6/6	杯部2/5	口縁端部刻み目。
34	1区	包含層	弥生土器	高杯	—	9.5	—	2.5YR5/6	脚裾部1/3	外面剥落。
35	1区	包含層	弥生土器	高杯	—	9.3	—	5YR6/6	脚裾部1/6	円形透かし孔4個。
36	1区	包含層	弥生土器	高杯	—	10.6	—	7.5YR7/4	脚裾部1/5	円形透かし孔2個1対。
37	1区	包含層	弥生土器	高杯	—	8.1	—	10YR8/3	脚部ほぼ完	円盤充填。櫛描沈線2単位、三角形刻み6個。
38	1区	包含層	弥生土器	高杯	—	13.4	—	2.5YR5/6	脚部1/4	円盤充填。脚部内面ナデ。
39	1区	包含層	弥生土器	高杯	—	10.0	—	10YR6/3	脚部3/5	ヘラ描沈線螺旋・鋸歯文。
40	1区	包含層	弥生土器	高杯	—	10.0	—	5YR6/4	脚部1/4	ヘラ描沈線4条、連続斜線。
41	1区	包含層	弥生土器	(台)	—	9.0	—	2.5YR5/6	台部1/4	竹管文3列、1個のみ貫通。
42	1区	包含層	弥生土器	(台)	—	—	—	10R5/6		三角形透かし孔3cm間隔。
43	1区	包含層	弥生土器	鉢	—	—	—	5YR6/6		
44	1区	包含層	弥生土器	鉢	—	—	—	5YR6/6		外面上端凹線2条。
45	1区	包含層	弥生土器	壺	—	—	—	7.5YR7/4		頸部貼り付け突帯に刻み目。
46	1区	包含層	弥生土器	器台	—	—	—	2.5YR5/6		口縁部外面凹線5条、円形浮文。
47	1区	土壙3	弥生土器	器台	—	—	—	2.5YR5/6		長方形透かし孔8個。ヘラ描斜格子文、凹線5条。
48	1区	掘立柱建物2	備前焼	甕	—	—	—	7.5YR4/1		
49	1区	掘立柱建物3	備前焼	椀	9.0	—	—	2.5YR6/6		自然釉付着。
50	1区	掘立柱建物2	備前焼	皿	(10.0)	(6.4)	2.3	10R4/2	1/8	底部糸切りか。
51	1区	包含層	須恵器	蓋	—	—	—	N6/0		ロクロ回転右。
52	1区	包含層	須恵器	蓋	—	—	—	N6/0		

掲載番号	出土地区	遺構・土層名	種別	器種	計測値(cm)			色調	状態	形態・手法の特徴など
					口径	底径	器高			
53	1区	包含層	須恵器	杯	—	8.2	—	N7/0	高台1/7	
54	1区	包含層	土師器	甕	14.2	—	(11.3)	2.5YR5/6	1/3	外面煤付着。
55	1区	包含層	土師器	甕	(23.6)	—	—	5YR6/4	1/6	内面剥落。外面下半煤若干。
56	1区	包含層	土師器	甕	22.0	—	23.5	2.5YR6/6	1/3	内面下半ヘラケズリ後ナデ。外面煤付着。
57	1区	包含層	瓦質土器	羽釜	—	—	—	N6/0		
58	5区	包含層	土師器	皿	12.0	8.0	1.9	10YR8/2	4/5	底面板目痕。
59	1区	包含層	須恵器	椀	—	5.8	—	7.5YR8/4	底部1/2	底部糸切り。
60	1区	包含層	須恵器	椀	—	6.6	—	7.5YR7/4	底部1/2	底部糸切り。
61	1区	包含層	須恵器	椀	—	5.8	—	N7/0	底部1/3	底部糸切り。
62	2区	焼土壙2	須恵器	甕	—	—	—	N3/0	口縁部1/9	櫛描波状文2段。
63	2区	焼土壙2	須恵器	甕	—	—	—	N6/0	頸部1/7	肩部外面平行タタキ後カキメ。
64	2区	土壙8	備前焼	擂り鉢	(32.0)	—	—	10YR5/2	1/4	ロクロ回転右。卸し目8条1単位。口縁端自然釉。
65	2区	土壙8	備前焼	擂り鉢	—	—	—	2.5Y6/1		スリメ5条残。口縁端自然釉。
66	2区	土壙8	瓦質土器	羽釜	—	—	—	N5/0		
67	2区	段状遺構1	瓦質土器	羽釜	(25.6)	—	—	2.5Y5/1	口縁部1/5	
68	2区	段状遺構1	備前焼	擂り鉢	—	—	—	2.5YR5/3		スリメ8条1単位。
69	6区	包含層	備前焼	擂り鉢	(30.6)	(13.0)	(14.0)	2.5Y3/1	体～底部1/2	縦方向スリメ13条1単位後に、斜め方向スリメ9条1単位。
70	6区	包含層	備前焼	擂り鉢	—	—	—	10R4/4	口縁部1/6以下	片口。口縁端自然釉付着。
71	6区	包含層	備前焼	擂り鉢	—	12.0	—	2.5YR5/4	底部2/3	ロクロ回転右。縦方向スリメ13条1単位後に、斜め方向スリメ。

石器観察表

掲載番号	出土地区	遺構・土層名	器種	計測値(mm)			重量(g)	石材	時期	備考
				最大長	最大幅	最大厚				
S1	1区	竪穴住居1	RF	32.5	23.0	6.0	3.9	サヌカイト	弥生中期後半	
S2	1区	竪穴住居1	スクレイパー	30.0	27.0	7.0	6.2	水晶	弥生中期後半	
S3	1区	竪穴住居2	鏃	42.0	19.5	5.5	3.9	サヌカイト	弥生中期後半	完形。
S4	1区	竪穴住居2	鏃	29.0	21.0	4.0	2.5	サヌカイト	弥生中期後半	
S5	1区	竪穴住居2	鏃	31.5	14.5	3.5	1.6	サヌカイト	弥生中期後半	完形。
S6	1区	竪穴住居2	鏃	24.0	16.0	3.3	1.1	サヌカイト	弥生中期後半	
S7	1区	竪穴住居2	槍？	42.0	18.0	6.5	4.8	サヌカイト	弥生中期後半	
S8	1区	竪穴住居2	錐	19.0	12.0	4.8	1.2	サヌカイト	弥生中期後半	
S9	1区	竪穴住居2	錐	26.0	21.0	4.8	1.8	サヌカイト	弥生中期後半	完形。
S10	1区	竪穴住居2	錐	37.0	19.5	6.0	4.0	サヌカイト	弥生中期後半	
S11	1区	竪穴住居2	錐	38.0	13.5	6.0	3.2	サヌカイト	弥生中期後半	
S12	1区	竪穴住居2	RF	27.0	16.0	6.5	2.6	サヌカイト	弥生中期後半	
S13	1区	竪穴住居2	スクレイパー	35.5	50.0	5.3	10.6	サヌカイト	弥生中期後半	完形。
S14	1区	竪穴住居2	環状石斧	65.0	125.5	21.0	237.5	閃緑岩	弥生中期後半	
S15	1区	竪穴住居2	叩き石	89.5	77.0	25.0	316.5	ヒン岩	弥生中期後半	蛤刃石斧転用。
S16	1区	竪穴住居2	砥石	45.5	21.5	5.0	5.4	頁岩(黒色)	弥生中期後半	
S17	1区	竪穴住居2	杵	157.0	115.0	93.0	2,290.0	ホルンフェルス	弥生中期後半	丹付着。
S18	1区	竪穴住居2	杵	86.0	86.5	60.0	800.0	流紋岩(灰青色ガラス質)	弥生中期後半	丹付着。
S19	1区	竪穴住居3	鏃	29.5	19.0	3.5	1.7	サヌカイト	弥生中期後半	
S20	1区	包含層	スクレイパー	47.0	38.5	7.0	11.3	サヌカイト		完形。
S21	1区	包含層	スクレイパー	28.0	27.0	9.0	6.0	サヌカイト		石包丁転用か。
S22	1区	包含層	太型蛤刃石斧	154.0	74.0	46.0	865.6	変閃緑岩		
S23	1区	包含層	叩き石	140.0	82.0	54.0	1,042.6	石英斑岩(黒色ガラス質)		蛤刃石斧転用。
S24	3区	包含層	環状石斧	68.0	111.0	29.0	308.4	細粒閃緑岩		未製品。
S25	4区	包含層	太型蛤刃石斧	135.0	63.0	43.5	233.3	ヒン岩		完形。

図版 1

1　1区東半
下層遺構面
（北西から）

2　1区西半
下層遺構面
（南東から）

3　竪穴住居 2
（南西から）

図版 2

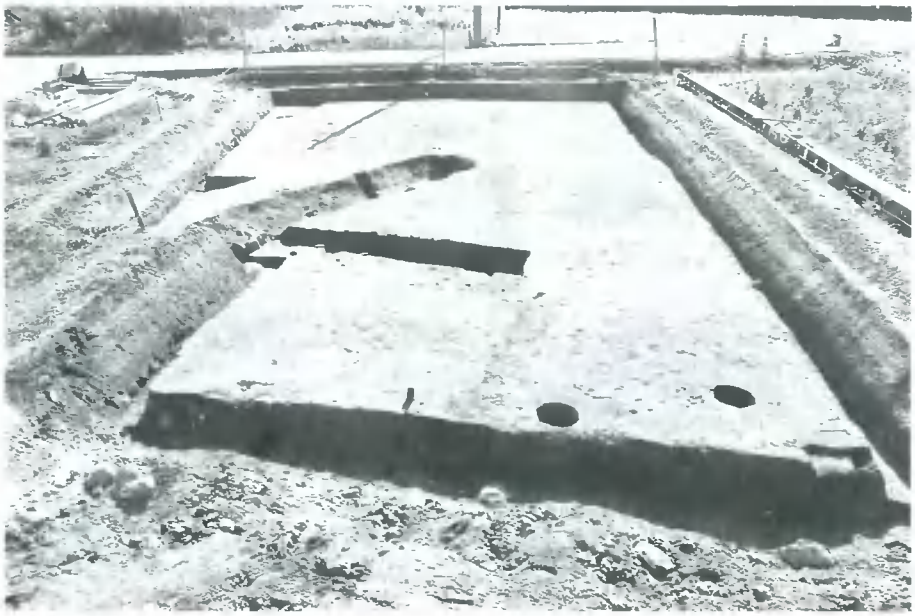
1　竪穴住居 3
炭化物検出状況
（北東から）

2　竪穴住居 3
（北から）

3　長方形竪穴
住居状遺構 1
（北東から）

1　掘立柱建物 1
（北東から）

2　土壙 1
（北西から）

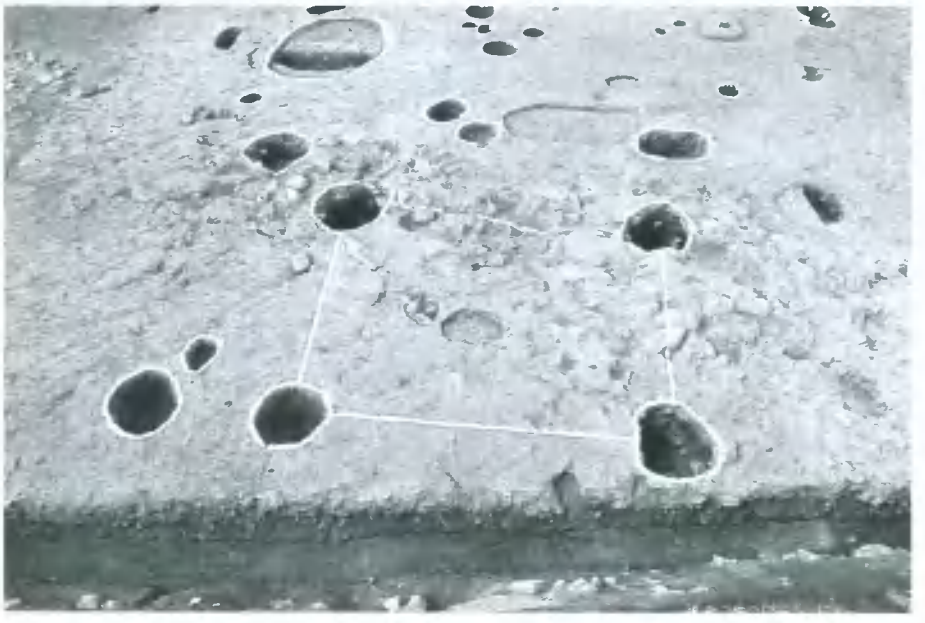


3　1 区東半
上層遺構面
（北西から）

図版 4

1　1区西半
上層遺構面
（北西から）

2　掘立柱建物2・3
（南東から）



3　掘立柱建物4
（北東から）

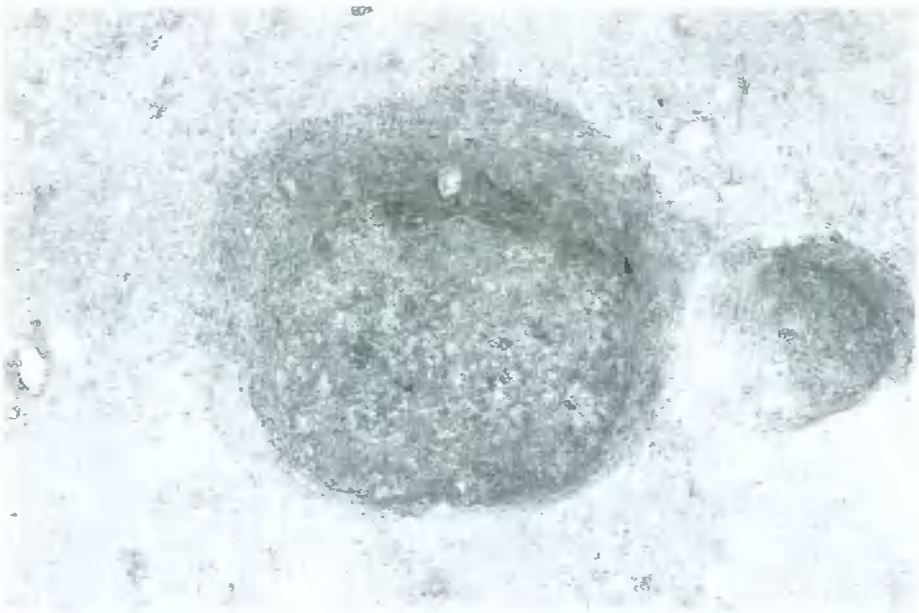
1　焼土壙 1
（東から）

2　溝 1
（北西から）

3　溝 2
（南から）

図版 6

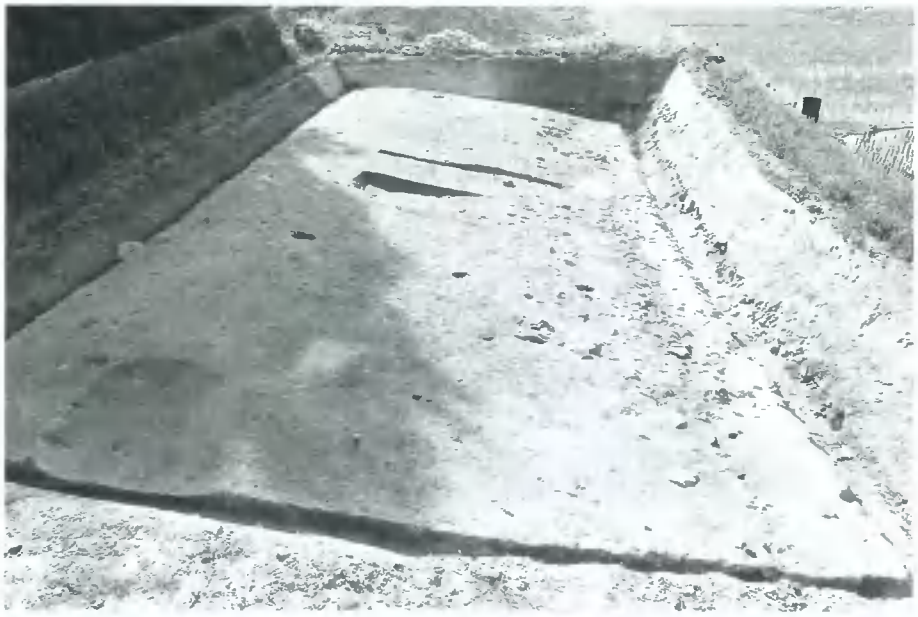
1　2区
（南東から）



2　焼土壙 2
（北東から）

3　段状遺構 1
（北東から）

1　3区東半
（北西から）

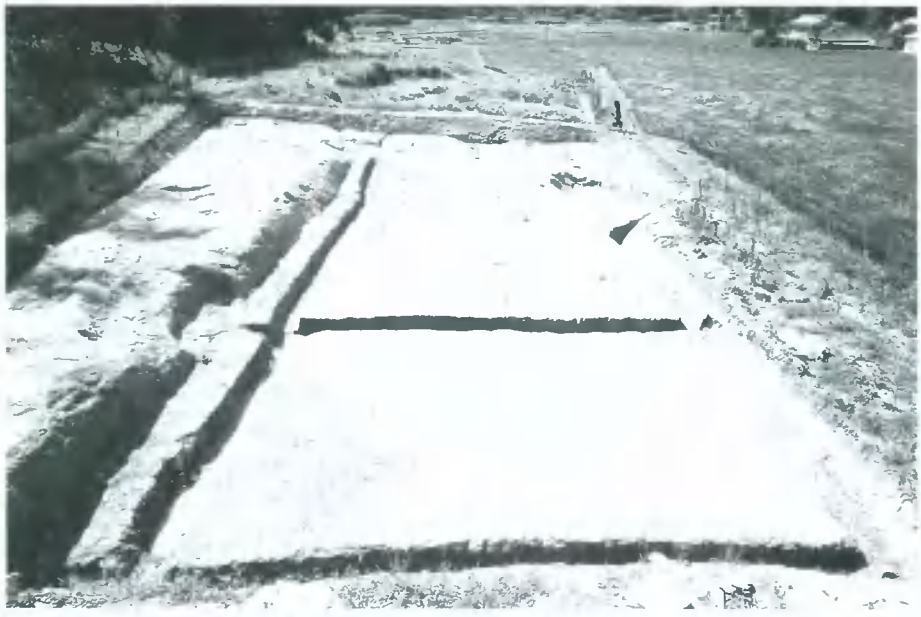


2　3区西半
（南東から）

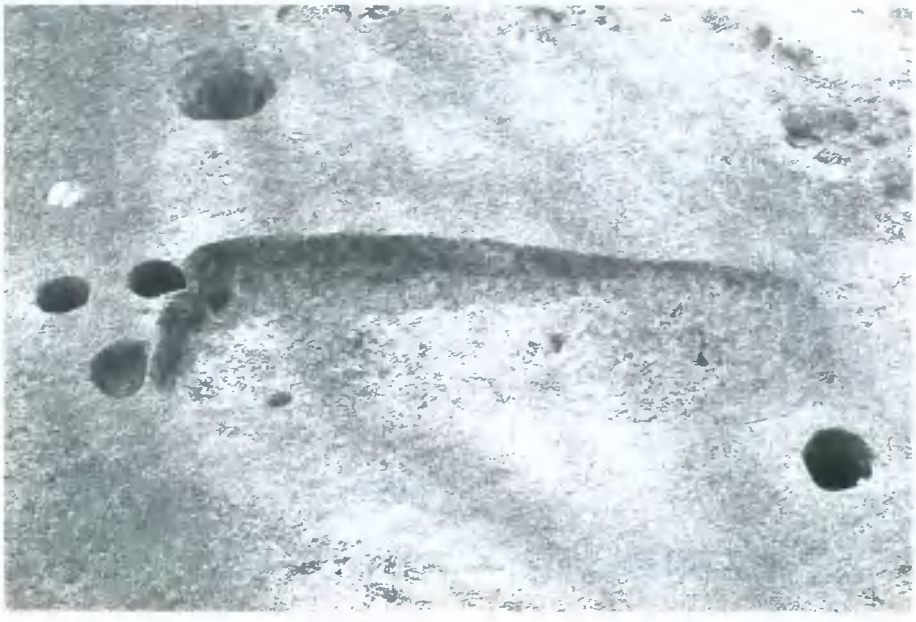
3　焼土壙 3
（北東から）

図版 8

1　4区東半
（北西から）



2　4区西半
（南東から）



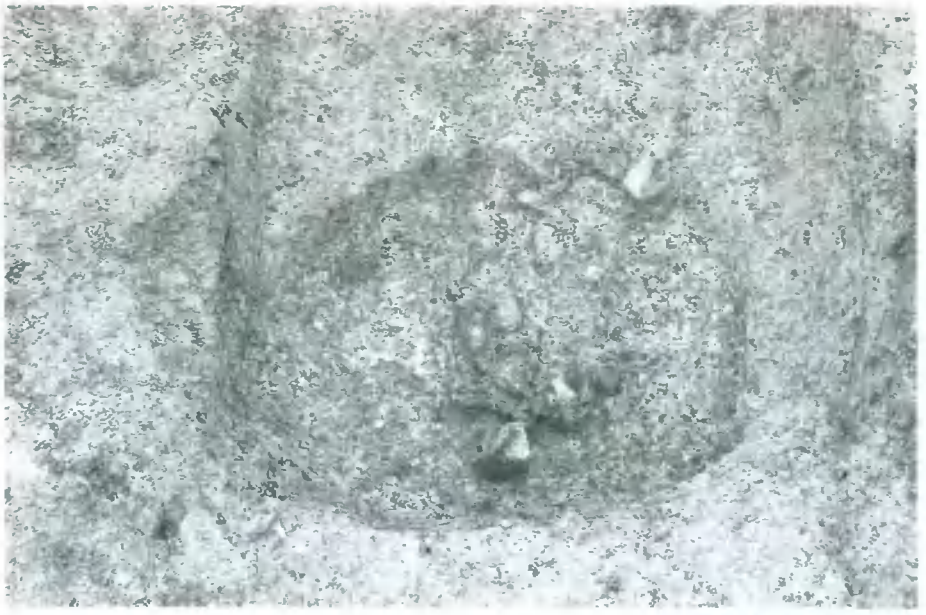
3　土壙 9
（北東から）

1　5区東半
（東から）

2　5区西半
（北西から）

3　焼土壙 4
（北から）

図版10

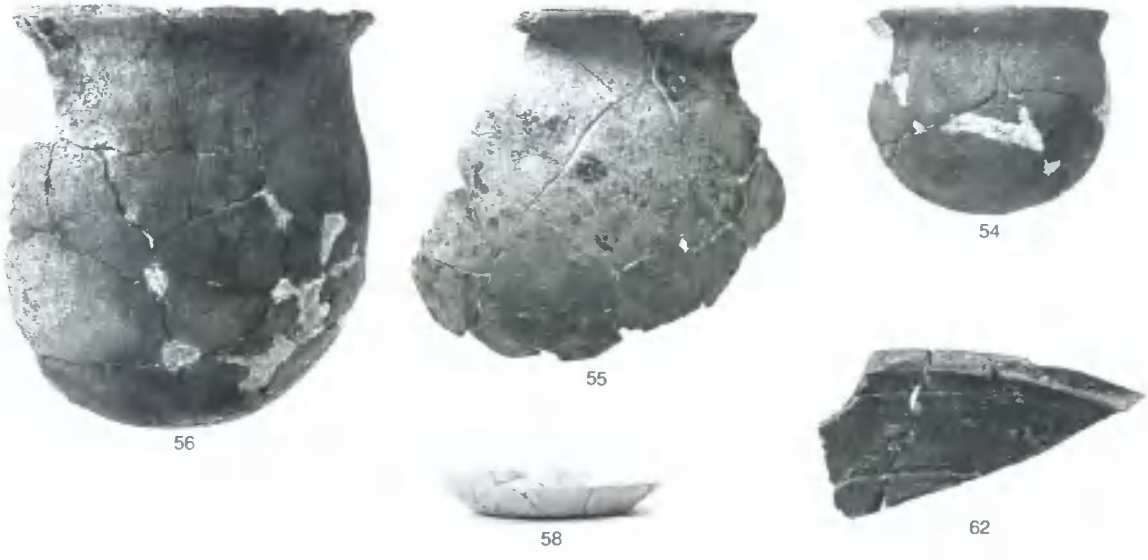


1　近世墓１
遺物出土状況
（南西から）

2　６区東半
（西から）

3　６区西半
（東から）

1　出土弥生土器



2　出土土師器・須恵器

図版12

出土石器・土製品・金属器

報告書抄録

ふりがな	みなくちいせき
書名	水口遺跡
副書名	広域営農団地農道整備事業(備前東部地区)に伴う発掘調査
巻次	1
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	163
編著者名	光永真一　氏平昭則
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター
所在地	〒701-0136　岡山県岡山市西花尻1325-3　Tel 086-293-3211
発行機関	岡山県教育委員会
所在地	〒700-8570　岡山県岡山市内山下2-4-6　Tel 086-224-2111
発行年月日	2002年2月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
水口遺跡 (みなくちいせき)	岡山県赤磐郡熊山町奥吉原水口 (おかやまけんあかいわぐんくまやまちょうおくよしわらみなくち)			34° 47' 1"	134° 7' 36"	1999.1.7～ 1999.1.22	60㎡	広域営農団地農道整備事業（備前東部地区）
						1999.5.1～ 1999.12.28	4,570㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
水口遺跡	集落・生産遺跡	弥生～近世	竪穴住居3軒・長方形竪穴住居状遺構1軒・掘立柱建物4棟・焼土壙4基・土壙11基・段状遺構1基・溝2条・柱穴多数	弥生土器・土師器・須恵器・備前焼・陶磁器・土製品・石器・鉄器・青銅器　整理箱20箱	・弥生時代中期後半の竪穴住居で丹を加工 ・古墳時代後半の焼土壙

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 163

水 口 遺 跡

広域営農団地農道整備事業(備前東部地区)に伴う発掘調査

平成14年 2 月28日印刷
平成14年 2 月28日発行

編集　岡山県古代吉備文化財センター
岡山市西花尻1325-3

発行　岡山県教育委員会
岡山市内山下2-4-6

印刷　株式会社中野コロタイプ
岡山市玉柏390